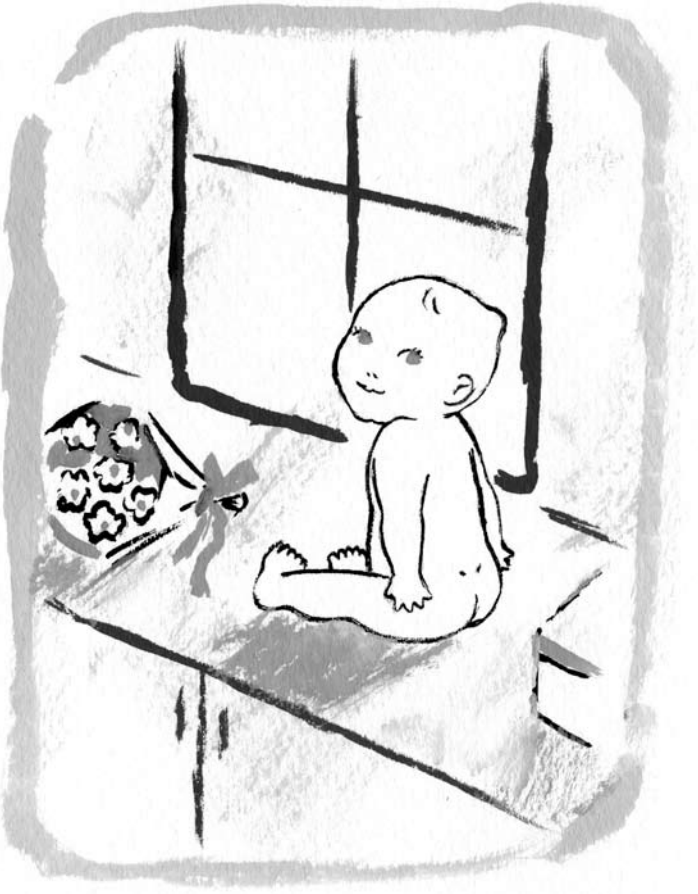

…それはいつも喜びである。
自らが悟ったことを誰かに教え、
その教えが理解された時

この言葉をどこからひっぱりだしてきたかって？　どこかの偉人の格言とでも？　いや、そんなわけはない。これは私の日記「若き自然主義者の手記」からの抜粋である。日記の題名があまり、しっくりこないのは分かっている――この私が、自然主義者だって？　しょうがない、日記を書き始めたのは随分と前のことなのだ。ある時、ふとラジオで「若き自然主義者の手記より」という言葉を耳にし、手に取ったノートに書き留めた。それはノートというより、辞書のような分厚いものだった。ノートの背表紙は幅広く、全体はこげ茶色で、白くて薄い光沢紙にうっすらと赤線が縦横に入ったものだった。その赤線の上には、ちっちゃい蜘蛛のような文字が書かれていた。なんて立派なノートなんだ！　このノートは、第五連隊が駐留していた空港のそばで見つけたものだった。当時、私は小学校の三年生で、学校が終ったあと、親友のエディック・ヴォスコボイニコフといっしょに、空港近くによく牛の放牧に行ったものだった。そこには、膝丈まで伸びた良質の牧草があった。

エディックは、ノートを初めて目にした時、こういった。

「わぁ、こりぁすごいや！　宿題用のノートはずーっとこの一冊ですむね」

六年生になるまで私は、エディックに日記を読ませてやっていた、でも、その後やめてしまった。やめてしまったのは九月二十二日以降のことだ。その日は特別な日だった。その日を境に、私の日記にはたくさんの詩が書かれるようになった。初めて書いた詩は今でもはっきり憶えている。

ソファーをかつぐ
その重さに汗が落ちる……突然
僕は君が他の人といるのを目にした
僕はソファーに座り込み、泣き出した

詩を書いたのはまさにこの日、九月二十二日で、決して誰にも見せることはなかった。一気に書き上げた詩をすぐに気に入った。実際は、その日ソファーなんか担いでいなかったし、ましてや、その上で泣くなんてこともなかった。むしろ、その日はとてもいい気分だった……

午後一時に、かばんに教科書をつめこむと、学校へ向かった。

軍の駐屯基地を横切る。学校の分校舎は、空港近くの駐屯基地の先にあった。当時、まだ二階建ての新校舎はなかった。分校舎は、コの字形の建物のなかにあり、片方がパイロット用の宿舎で、その反対側が私たちの教室になっていた。

僕は急がなかった、間に合うことが分かっていたから。たとえ間に合わなかったとしても、今日に限っては大丈夫だ。今日は僕の誕生日なんだ。そう、大丈夫さ！

宿題を全部済ませていたわけではない。やったのは、幾何と物理の宿題だけだ。生物学と国語はやっていなかった。

《悪い点数をもらって家に帰っても、今日は怒られることはないさ》

学校には早く着いた。エディックは僕を見つけると訊ねた。

「幾何の問題できた？」

「もちろん」と僕は答えた。

途端に、クラスのみんなが僕に注目するのを感じ、気分がよかった。けれども、正直、クラス全員が幾何学の問題を解けてないと知っていたら、こんな日に、僕も問題を解こうとはしなかっただろう。代わりにゲンカ・ロゴジンスキーの自転車でも乗り回していた方がましだったろう。

でも、まあ、そんなことはどうでもいい。

みんなが、宿題の解答を僕から書き写した。成績一番のスベトラーナ・カルマノワさえも。

イワン・アンドレーヴィチ先生は、教室に入るといった。

「宿題のノートを開いて、机の端に置くように」

みんながノートを置くと、先生は教室を一周し、その目で確認した。

「みんな、宿題はやってきたようだね」と、疑い深そうにいった。

「でも、六年B組で解けた者は一人もいなかった」
教室はざわめいた。
「だからって……先生、僕たちと彼らをいっしょにしないでください！　あそこはみんな、怠け者なんです！」
この騒ぎのなかで、スヴェトラーナ・カルマノワは、有名俳優を見るように僕を見つめていた。僕は少し動揺し、それを彼女に気づかれないように、かばんの中を引っ掻き回した。
スヴェトラーナについていえば、清楚でとても美しい子だった。成績優秀の女生徒が全員そうであるように、告げ口したり、鼻にかけたり、おべっかを使ったりすることはなく、笑うと頬にはえくぼができた。彼女は聡明な女性だ。
「問題を解いたのは全員ではないはずだ。何人かは……」
イワン先生は、ここで少し間を置き、僕は、先生の視線を感じた。
「何人かは書き写したようだね。そう、書き写したに違いないな。おそらく、書き写した人のほうが多いだろうね」
僕が視線をあげると、先生と目が合った。先生は僕のことをじっと見つめた。心臓がどきっとした。なぜ、僕がおどおどしながら、かばんを引っ掻き回しているのか、先生は気づいたに違いない。思わず視線をそらすと、先生はいった。
「さあ、グプキン君、正直にいいなさい！　書き写したね？」

その言葉を聞いた途端、僕はほっとした。立ち上がり、作り笑いを浮かべいった。
「書き写しました」
「誰から？」
「誰からって？」もちろん、僕の機嫌が悪ければ、黙っていたかもしれない。でも、今日は僕の誕生日だ。
「彼女からです」とふざけていってしまった。
スヴェトラーナは、驚きのあまり〝きゃっ〟と叫び声を上げ、思わず立ち上がった。そんな彼女の様子を目にした途端、僕の浮かれた気分は消えてしまった。教室は静まり返った。みんな、僕が彼女のノートを書き写したのではないことを知っていた。クラス中が、彼女がどう答えるのか、固唾をのんで見守った。一方、僕は気まずくなった。スヴェトラーナを悪者にしてしまった。
「先生、彼は嘘をついています。書き写したのは私の方です」
「君が！　書き写した？」イワン先生は、驚きのあまり眼鏡を落としそうになった。
「ええ、私が」スヴェトラーナは、さらに真っ赤になり、うつむいて席に座った。教室の中は、しんと静まりかえった。
「さっぱり分からん！　グプキン君、いったい誰が誰から書き写したのか、君が説明してくれないか」
なにをどういえばよかったのか？　僕は顔をそらし窓の方を見た。先生がその態度に腹を立

てて、僕に罰を与えてくれればいい！　と思った。

しかし、イワン先生はふと相好を崩した。

「ははあ、そういうことか！　分かったぞ！」

先生の方を向くと、彼は少し微笑みながら、なにか意味ありげにスヴェトラーナを見つめた。スヴェトラーナは当惑し、真っ赤になった。

「そうか！　そういうことか！」

先生はそうくり返すと、成績簿をじっとみた。それから、問題集を開き、薄笑いを浮かべながら訊ねた。

「評価〝5〟もしくは〝4〟をもらいたい者は？」

教室は騒がしくなり、あちらこちらから声があがった。

「はい、私です、私……！！！」

「では、『本日の主役』、グプキン君になってもらおうと思うがどうだろう？」

教室は一段と騒がしくなった。偶然とはいえ、先生にいわれなくても今日は僕が『主役の日』――誕生日なんだ。

「グプキン君、君が家で解いてきた問題……まあ、一応そういうことにしておくが、これには二つの解き方がある。一つは、君のノートに書かれている方法だ。ちなみに、複雑な方法で解いたね。では、もうひとつの簡単な方法で解いてみたまえ。解けたら評価〝5〟、もし解けなか

ったら、評価〝2〟の落第点が二つ成績簿につく。つまり、問題を解けなかったことに対する〝2〟、それと、他人のノートから書き写した罰の〝2〟だ。でも……〝2〟と〝2〟を合わせて評価〝4〟ってことにしておいてやるか」

先生は、後ろで手を組みながら、ゆっくり教室の中を廻った。

「一番最初に解けた者には、成績簿に評価〝5〟をつけよう」

時間はあっという間に過ぎていった。僕は、休憩時間にやっと問題を解くことができた。先生は、休憩時間も授業のうちとみなした。他に、問題を解いたのはスヴェトラーナだけだったが、評価〝5〟はもらえなかった。なぜなら、イワン先生にいわなかったから。実際には、僕よりも早く授業時間内に問題を解いたのだ。それは、エディックが僕に話してくれたことだった。エディックは、彼女と並んで座っていたので、自分の目でそれを見ていた。

スヴェトラーナは、下書き用の紙に問題を解いた後、清書しなかった。僕が接線に垂線を下ろして、二つ目の二等辺三角形を作っていたのを見て、彼女はうれしそうに「もうすこしで解けそうね！」と微笑んで、それでもまだ清書しようとはしなかった。僕がなんらかの方法で、彼女から解き方を教えてもらったなどと先生に思われないように、気を遣ってくれたのだ。

最後の休憩時間、チョムカ・フデャコフがゾスカ[1]で遊び始めた。彼のゾスカは、ボタンのような四つの穴が開いた鉛の薄板に、ふわふわとした白い毛皮がついていて、とても立派なゾスカだった！　チョムカはそれを三百回以上も落とさずに蹴り続けることができた。チョムカが、教

1《ゾスカ》中国から伝わった遊び。蹴鞠の一種

室内でゾスカを蹴り始めたが、これは学校では禁止されていた。ゾスカから舞い上がる埃やそれ以外にもいろいろと危険だから。日直のリディカ・ヤグヌィシェワは、彼の方に駆け寄ると、ゾスカを勢いよく取り上げ、ぽんと投げた！　ゾスカは、曲線を描きながら落下傘のように落ちていった。スヴェトラーナ・カルマノワは、落ちてきたゾスカを手ではらうと、それは僕の額に直撃した。みんなの笑いが渦まくなか、スヴェトラーナは何事もなかったように僕に背を向けた。僕は、誰にゾスカをぶつけられたか気づかないふりをして、窓のしきいに飛び乗ると、窓の外にゾスカを突き出した。

「誰だ、投げたのは？　三つ数えるから白状しろ。……いち、にぃ、……」

チョムカが飛んできた。

「ヴァレーラ・グプキン、放り投げないでくれ……。スヴェトラーナが悪いんだよ！」

「なにぃ！」と声を荒げてはみたが、その場から動けなかった。ふざけてでも、スヴェトラーナにつかみかかることはさすがにできない、今日あったいろいろな出来事の後では。スヴェトラーナは、女子が集まっている方に逃げていった。女子生徒は、スヴェトラーナを守ろうとし、男子生徒たちは、海賊のように恐ろしげな顔で彼女たちに飛びかかった。僕が、スヴェトラーナの髪のリボンを引っ張ると、女の子たちは、僕の制服の襟の白いカラーをむしり取った。その時、生物の女教師が教室に入ってきて、僕たちが、教室の隅でぎゅうぎゅうに押し合っている現場を見られた。

「なんという騒ぎですか！　今日の日直は誰です？　ヤグヌィシェワさん、犯人は誰なの？」
「はい、リュボーフィ・セルゲーヴナ先生……でも、誰が犯人かは見ていなかったんです」
ヤグヌィシェワの目には涙が溢れていた。
「見てなかったですって？」
生物の先生は驚いた様子だったが、すぐに、効果的な教育法で対処した。
「まあいいわ、ヤグヌィシェワさん。犯人は名乗り出る、そう私は確信しています」
《もちろん、ちゃんと話しますよ》僕は、立ち上がった。すぐに、スヴェトラーナも立ち上がったのを見て、すっかり嬉しくなった。
「二人とも、教室から出ていきなさい！」
生物の先生は、真剣だった。
僕たちはすばやく教室の中を横切って、廊下に出た。僕の前を歩いていたスヴェトラーナの肩が、笑いをこらえるあまり小刻みに震えていた。廊下に出た途端、僕たちは大声で笑いだした。教室の中でも同じように生徒の多くが笑いだした。
先生の声が聞こえた。
「カルマノワさんには、本当にびっくりさせられたわ。あのグプキンの影響を受けるなんて！いつも落第ぎりぎりのグプキンの……」

家には、エディックといっしょに帰った。彼は、道々、女教師のまねをしてみせた。とくに、僕に注意しているときの時の先生の怒った表情。それから、スヴェトラーナが幾何の問題を解いたのが、僕より早かったことも教えてくれた。僕はスヴェトラーナのことを「やっぱり、彼女ってすごいなー」と誉めた。

この日以来、エディックに日記を見せなくなった。九月二十二日、僕は初めて詩を書いた。

また、「若き自然主義者の手記」には、こんなことも書いた。

今日、僕は十三歳になった。スヴェトラーナ・カルマノワを「……」と感じている。五年後、この「……」のかわりに、ある一つの言葉を書き込もう。僕は誓う、誰にも彼女を傷つけさせはしない。この誓いの言葉について、彼女はなにも知るべきではない。それはまだ秘密の言葉、彼女にさえも。

この秘密の寿命は長くはなかった。あの時以降、私の日記を目にした者はいない、エディックさえも。しかし、今では、スヴェトラーナ・カルマノワに対する僕の気持ちは、みんなが知るところとなっている。

それは、今年の夏に起きた。家で飼っている牛のロスカがやっと子牛を産んだ。母さんはいった。

「ロスカは、リダ・ヤグヌィシェワが世話をするから、おまえは、父さんを手伝っておくれ」

僕は、第一班で作業している父のところに向かった。そこで、少し話しをすると、父は、僕を、脱穀場の責任者をしているワーシャおじさんのところへ連れて行った。伯父は、収穫期に『ジル[2]』のトラックの荷台で、二人目の作業員として働いてくれないかといった。

ジル製のトラックは、一番奥の穀物倉庫のそばに停まっていた。一人目の作業員が誰なのか、すぐには見分けがつかなかった。サイドステップの上に立ち上がったとき、そのもう一人の作業員が、女の子であることに気づいた。

それは、他でもないスヴェトラーナ・カルマノワだった。

「君だったのか！」

「私よ」スヴェトラーナは、そういうと、予備のタイヤに腰掛けた。

「あなたが二人目の作業員ね？」

「うん」

僕は、驚きを隠せずにいった。

「じゃ、乗って」

僕の驚いた様子を見て、逆に彼女は楽しんでいるみたいだった。なぜなら、彼女は笑いながら、またいった。

2《ジル》リハチョフ記念モスクワ自動車工場のこと

「乗っててば！」

もっとも、スヴェトラーナがトラックの荷台にいたのは、別に不思議なことではなかった。彼女は、ずいぶん前から、コルホーズで手伝いたがっていたが、なかなか実現できずにいた。夏休みになる度にアルザマス[3]の叔母さんのところで過ごしていた彼女は、９年生[4]になりやっと、自分の希望を叶えた。

「早く乗っててば。ほら、もう太陽が真上まできてしまってるわ」

彼女はそういって、頭に被っていたスカーフを指で手前にひっぱり、日差しをよけた。まるで、太陽から顔を隠すようにして畑で働く、田舎の女のようだ。

「君、女優の誰かに似ているよ」

僕は、荷台に乗り込むと、水を運んでいる運転手を見た。運転手はトラックに近づき、バケツを置いた。ボンネットを上げ、ラジエーターのキャップを外すと、それをぱっと手からはなした。

「あちっ！」

「熱い？」

「キャップが熱くなっちまった」と運転手はいった。

「新入りかい？」

「はい」

「座りな。立っていても仕方ないからな」とウクライナ訛で話した。

3《アルザマス》モスクワ市から南東に 410 キロのところにある小都市

4　ペレストロイカ以前のロシアの義務教育は八年製、高等教育が二年制。九年生とは日本の高校生にあたる。

彼は、ラジエーターに水を入れると僕にバケツを渡した。僕は、バケツをひっくり返し、その上に座った。

「横に座る？」

スヴェトラーナは、そういって席をつめたが、彼女の横には座らなかった。

「ヴァレーラ、つまりあなたは、二十日間早く生まれたせいで、まるまる一年間もったいないことをしちゃったわけね？」

「一年間ってなんのこと？」

「だって、九月二十二日生まれでしょう」[5]

「ああ、教頭のガリーナ・パヴロヴナ先生のせいだよ……。君がここに来る前からずっとそうやってきた人だから仕方ないよ、二十日違いだろうが、一日違いだろうが『規則で、七歳にならないと入学は認めません……』だってさ」

「私は良かったわ。六月十日生まれだもの」

トラックが動き出したので、彼女は荷台につかまり、バッグを引っ張りだした。

「ねえ、新聞でパナマ帽を作ってあげましょうか。じゃないと、日に焼けて鼻の皮がむけてしまうわよ」

「うん、じゃ、作ってよ。でも、新聞紙なんかないだろう？」

「新聞？」

5　ロシアの新学期は９月から始まり、七歳で一年生に入学する。
９月１日の時点で７歳になっている児童は入学を許可される。

彼女は、チャックの壊れたバッグを開け、新聞を取り出した。
「パンを包もうと思って持ってきたんだけど、肝心のパンを忘れてしまったの」
バッグを押しやると、膝をついて帽子を作り始めた。
「気をつけろよ！　トラックの上なんだから危ないだろ！」
「縁起でもない事いわないで」
三つ編にしたおさげが邪魔したので、彼女は両手ではらった。そして、僕にパナマ帽を被せた。
「これじゃあパナマ帽じゃなくて、兜だな」
「じゃ、兜でもいいわ。でも、ちゃんと手で押えてね。でないと風で吹き飛ばされるから」
僕の傍に立った彼女のふわりとしたワンピースが、僕の膝をくすぐった。スヴェトラーナは、そのたびに洋服の裾を手でおさえた。僕は彼女から目をそらし、じっと前を見ていた。彼女になにかを気づかれるのが怖かった。
コンバインのそばでトラックが止まった。運転手が声をかけた。
「おや、お嬢さん、いい男をつかまえたね！」
気まずい雰囲気の中、互いに視線を合わせないようにしながら、せっせと荷台に飛び散った小麦の実を平らに均し始めた。スヴェトラーナは、手を使って平らにしようとしていた。小麦の実のなかにうずもれている彼女の裸足と両腕が、黄金色に輝いているように見えた。小麦の実が

彼女の胸元に入るたび、彼女は作業の手を止めて笑っていた。そんな時も僕は一人で作業を続けた。できればずっと、彼女に笑っていて欲しかった。

「まあ、働き者ね！」

そんな褒め言葉にも、手を休めず働き続けた。小麦の山のてっぺんに勢いよく身を投げ出すと、温ったかい実が背中を流れ、まるで水しぶきのようにあたり一面に飛び散った。

小麦を倉庫に搬入するには、スコップで実を投げ入れつづけなければならず、十回目の搬入が終わった頃には、スヴェトラーナは僕と張り合うのを止めた。

「なにかスポーツで級をもっている？」

「スキーやっているけど……」

「ああ、そうだったわよね、私は体操の二級よ」

「ははぁ、どうせおまけでもらったんだろう」

「信じないの？」

スヴェトラーナはぷいとそっぽを向くと、箒を投げ出した。そして、両手を大きく振り上げ、空中で足をはさみのように動かしながら側転をし、いきなり僕の目の前でとまった。僕はおどろいて思わず彼女の体を支えた。僕にぐっと顔を近づけ、得意げな笑みを浮かべる彼女を見て、僕は笑い出した。

「スヴェトラーナ、なにやってんだ。下着が丸見えだよ」

片手で自転車を押さえ、僕たちに金歯をみせるように、図々しい笑みを浮かべたサーシャ・ツィガリニュクがいった。スヴェトラーナは赤面し、僕は頭にきた。一瞬の出来事だった。

「えぃ！」僕は荷台から飛び降りると、彼に殴りかかった。サーシャは左肘でそれをうけ、僕の拳は彼の頭をかすった。次の瞬間、彼は自転車を捨て、ありったけの力で僕の顔を殴った。僕は自転車につまずき、仰向けに倒れる瞬間、トラックのタイヤで肩をすりむいた。サーシャは僕の上に飛び乗ったが、僕は足で彼を蹴飛ばした。

「このヤロー！」

サーシャがスコップをつかむと、そこにトラックから運転手が駆け寄ってきた。

「この子に手を出すな！」

サーシャは、すぐに怖気づいた。

「俺はなにもしてないよ、あいつの方から始めたのさ。スヴェトラーナ、ほら取って！」

サーシャは彼女に向かってスコップを抛ると、自転車に飛び乗り門の方まで行き、そこで振り返っていった。

「集会場のクラブで話をしよう。スヴェトラーナ、君も来てくれ。君の分のチケットも取ったから」

「さあ、いいからもう行け！」

運転手はそういって、僕の方を向くとなぜか小声でいった。

「あいつには用心しろ。ツィガリニュクの兄貴は、喧嘩でムショに一年入っていた奴だからな」つばを吐くと、運転手はトラックに乗り込み、僕は、トラックの下からくしゃくしゃになった兜を取り出した。

トラックでコンバインの方に移動している間、僕は肩についた埃と血を下着で拭き取った。擦り傷はそれほど深くなかったし、あまり考えないようにした。

スヴェトラーナは、ワンピースの裾で膝を隠すようにしゃがんでいた。僕は、唇についた血を拭き取るのが恥ずかしくて、舌で舐めた。彼女が立ち上り、ワンピースがふたたび僕の膝に触れた。彼女が黙っている間は、僕は、彼女の方を見ようとはしなかった。

「もしかしたら、あの人、謝ってくるかしら？」

ふと、彼女を見上げると、その瞳に涙があふれていた。

「もちろん、謝ってくるとも！」涙を浮かべて心配してくれたことが嬉しかった。

「集会場のクラブで決着をつける約束をしたのを君も聞いていただろう？」

くしゃくしゃになった兜は役に立たなかったが、太陽なんてもう気にしない。鼻の皮がむけるならそれでもいい、今はそれどころではない。

夜十時半ごろ、斜めのポケットが印象的なカーキ色のジャンパーを着て、コルホーズのクラブへと向かった。ジャンパーは、ウラジオストックからオーリャ姉さんが持ってきてくれたものだ。かっこいいジャンパーだ！　近所に住む顔なじみの多くは羨ましがり、精米工場の近くの子

供らの何人かは、最初、僕のことを都会っ子か軍人の子と勘違いして、けんかをふっかけようとした。

十一時、僕はクラブに着いた。頭上高く輝く月は一面を照らしていたが、闇が木々の間を支配していた。池ではカエルが鳴き、八月の最後の蛍が、歌うように庭を飛びまわっていた。

「こっちに来いよ！」

僕は、少年たちのところに近づいていくと、すぐにみんなの顔が分かった。互いに挨拶を交わすと、エディック・ヴォスコボイニコフがいった。

「ダンスホールで、お前のことを待っている」

「精米工場のやつらか？」

「他に誰がいる？　サーシャ・ツィガリニュクが、板塀の切れっ端を手に、お前のことを聞いていたぞ」

アコーディオンの音がした。女の子や少年たちに囲まれたリョーニャ・フデャコフが見えた。軍服をまとったリョーニャは格好よかった。

「やあ、みんな！」

「こんばんは、リョーニャ。いつ戻って来たの？」

ゲンカ・ロゴジンスキーがリョーニャに近づき、彼らは挨拶の握手を交わした。それから、リョーニャはアコーディオンの蛇腹を広げた。ワルツ『満州の丘で』の調べに、人々は体を揺ら

し、ダンスホールへと流れていった。
ゲンカ・ロゴジンスキーは、僕たちのところに戻ってきた。
「ほら戦車兵が軍曹になってお戻りだ。三回も名誉の負傷してさ」
エディックは、僕に聞いた。
「スヴェトラーナが原因かい？」
「うん、そうさ」
僕は、マッチを擦ってぽんと上に投げた。
「ほら僕がいったとおりだ？」と、エディックは仲間に向かっていった。
仲間は騒ぎ出し、ゲンカ・ロゴジンスキーはしかめっ面で僕にいった。
「お前が悪いんだよ！　サーシャはスヴェトラーナに去年もラブレターを送ったりしてたんだ」
「それに、サーシャは、お前が最初に殴りかかったといってるぞ」
トーリック・ラーダが僕の方を見てそういうと、みんな、静まり返った。僕は、マッチの箱をポケットにつっこむと、わけもなくそれをかき回し始めた。
「そうさ、あの状況なら先に殴りかかったって、しようがないだろう」
「だから、いってるじゃないか。お前が悪いって」
ゲンカはもう一度そう繰り返した。
もちろん、ゲンカに腹を立てる理由などなかったが、僕は彼の言葉に苛付いた。ゲンカとき

たら、誰が悪いとか、誰がラブレターを書いたとか、なんでそんなこといわれなきゃいけない。
「まあ、いいや！」
そういってダンスホールに向かった。
「ヴァレーラ！　待ちなよ！」
エディック・ヴォスコボイニコフが、僕を追いかけてきた。
「家に帰ったほうがいいんじゃないか？」
彼は、僕が怒らないように恐る恐るそういった。そこで、僕は真実を話した。
「あいつがスヴェトラーナを侮辱したんだ！」
それ以上は言葉を交わさず、エディックと並んで歩いていった。トーリック・ラーダが、ダンス・ホールの入り口まで僕らを追いかけてきた。
「今、ゲンカが、仲間のヴィーチャとコーリャを連れてきてくれるよ」

「よう、ガキンチョ！」
サーシャ・ツィガリニュクは、すでに僕を待っていた。
彼は、月明かりがまーるく照らす円の中に飛込んでいくと、まるで僕とは百年以上の付き合いでもあるかのように、嬉しそうな顔をした。精米工場の連中を従えていた。
「チケットを買いに来たのか？　コネで一枚1ルーブルにしてやるよ」

サーシャは、板の切れっ端を左手に持ち替えると、チケットを取り出した。彼の方に近づくと、少年たちの輪が僕らを取り囲んだ。

「柵板を使って、値段をつりあげてるのか？」

「ああ、そうだよ！」

サーシャは、いたずらっぽくいった。少年たちの輪がさらに狭まった。ジャンパーが破かれるかもしれない。大事なことはパンチをはずさないこと、そして、落ち着くこと。エディックは、すぐにでも殴りかかりそうだ……。スヴェトラーナは来なかった。

「チケットを渡してくれ。でも、まずは板を置けよ」

「別に板は邪魔にはならないね」

「びびってるのか？」

サーシャ・ツィガリニュクは、笑い出すと板を放り投げ、みんなに向かっていった。

「じゃあ、ついでにもう一枚、昨日の分の入場券も買っていただこうと思うが、みんなどうだい？」

周りの少年たちが騒ぎ出すと、サーシャは僕の方へゆっくりと歩き出した。僕がポケットから手を出すと、リョーニャ・フデャコフのアコーディオンがワルツからフォクスロット調の曲へ切り替わるのが聞こえた。僕は、みんながホールで踊っている様子や、リョーニャのキャスケット帽からのぞく癖毛などを想像した。

スヴェトラーナは来なかった。

サーシャが飛びかってきた。僕は倒れながら思いっきり彼を蹴った。僕たちは同時に立ち上がった。

《リョーニャは、コードだけを弾いていた……簡単なコード……。でも、そんなんじゃだめなんだよ……》

サーシャが手を伸ばし、誰かが柵板を手渡した。

スヴェトラーナは来なかった。

挑発するように体を前に突き出すと、彼は板で殴りかかってきた。僕はすぐに姿勢を低くすると、柵板が頭のてっぺんをかすった。サーシャが体勢を崩し、僕のパンチが彼のあごをとらえた……。

ゲンカが、ヴィーチャとコーリャを連れて駆けつけた時、僕とエディックはすでに井戸のそばに腰掛けていた。バケツの水に浮かんだ月。交代で、月に唇をそっと触れた。月は冷たかった。ふと思った、もう八月だ、もうすぐ十六歳だ。父は十六歳で結婚したんだ……。なんでそんなに早く……。革命前は、みんな早く結婚したんだ……。

「僕は、一生、結婚なんかしない」

エディックは、いぶかしげに片方の目で僕を見た。もう片方の目は腫れあがっていた。なんだか可笑しくなって、みんな、笑い出した。

「エディック、家に帰ったら誰もお前だとは分からだろうな？」と、僕はいった。
「お前の方こそ！」彼は、僕のジャンパーの切れ端を引っ張ると、トーリャ・ラーダも恐る恐る自分の肩をさすり、また、みんなで笑った。
僕たちは、草の上に寝転んで、長いこと黙っていた。いろいろと考えることが気持ちよかった。たとえば、次の日、空が白み始めた頃には、穀物庫に出かけよう、そして、次の日も、またその次の日も。
「そろそろ、家に帰ろうか？」エディック・ヴォスコボイニコフが立ち上がった。
「帰ろう」僕はみんなと握手をして別れると、月あかりが、干草置き場までの道を照らしていた。
ベッドに横になると、なぜかまた、もう八月だ、と思った。《いいや、僕は決して結婚しない》。目を閉じるとスヴェトラーナの姿が浮かんだ。《パナマ帽を作ってあげましょうか？　じゃないと、日に焼けて鼻の皮がむけてしまうわよ？》
その夜、僕はずっと考え事をしていた。いろんな楽しいことについて。スヴェトラーナのことや、決して結婚しないことなどを。
サーシャ・ツィガリニュクがスヴェトラーナにラブレターを書いていたことは考えないようにした。

三月二日には、まだ空港近くの分校舎で学んでいた。二階建ての新校舎に通い始めたのは、七日になってからだった。

化学のテストがあった。僕と、それにコーリャは、選択可能なA・Bの問題のうち、Aを選択して1時限目で済ませてしまった。（通常、テストは九十分、2時限分の時間が与えられる）。自由になった2時限目は、学校近くのベンチに腰掛け、雪解け水が流れる様子を見ていた。その細流に、太陽の光が反射して輝き、溶けた銀のようだった。もちろん、銀ではなかったが、ふとそんな風に僕には感じられるのだった。

僕たちがベンチに座っていると、突如、飛行機の騒音が聞こえた。

「エンジンを温めている音だよ。飛行が始まるのさ」

そういったのはコーリャだった。コーリャの父親は大佐で、軍の燃料補給車両部の隊長だった。彼がいったとおり、十分ほどすると、空港の空に一機、また一機と飛び立って行った。僕たちのいる場所から、飛行機が滑走路から飛び立つ様子は見えなかった。空軍将校たちの食堂の建物が視界を妨げていた。飛び立った飛行機は、食堂の屋根を滑り出すように目に飛び込んできた。

エディック「屋根から飛び立っているみたいだ」

コーリャ「ああ、今にもう一機飛び立つさ。三機の編隊を組んで……」

僕はその時、五年生の頃、よく通っていた空軍将校の食堂のことを考えていた。その頃、空軍大尉であるワーニャおじさんは、わが家に間借りをしていた。彼は、みんなが「ダグラス」と呼んでいた緑色の飛行機イリューシンに乗っていた。ワーニャおじさんは、食券をたくさん持っていた。おじさんは僕を呼んでいった。

「ヴァレーラ、食券を償還してきてくれないか」

食券の償還――とは、つまり、彼のかわりに食堂に行って、朝食や昼食、夕食を食べに行くことだった。僕は、よく食券を償還していた。それも一人ではなく四人で――僕、エディック、トーリック、そして、ゲンカ。家で飼っていた牛を空港の向こう側の窪地に放牧すると、僕たちは食堂に向かった。中に入り、帽子をとると（当時、僕たちはまだ青線が入った軍帽を被っていた）、隅っこのテーブルに陣取った。そして、おとなしく待っていた。ウェイトレスが近づいてきて、聞くのだった。

「食券を持っていますか？」

僕は、全員の分の食券を渡した。ゲンカ・ロゴジンスキーが初めて僕らと一緒に食堂にきた時のことをよく憶えている。僕らは、食券を渡して待っていた。僕は、いつも待つのが好きだった、多分、食べる時間よりも。本物のパイロットのように座っていると、いろんな料理がでてくる。油であえた甘いライスが出されたが、皿の底の方にほんの少しだけだった。ゲンカは、それを見て「ちぇっ、これじゃ、うちの猫にあげても足りないや」とつぶやいた。みんなは、笑って

みていた。だって、ゲンカと違って僕らは初めてじゃなかったし、このライスは食欲をそそるための前菜として出されることを知っていたからだった。それから銘々に肉入りのボルシチとステーキ、フライド・ポテト、ココア、チョコレート、それに箱入りのクッキーが出された。ゲンカ・ロゴジンスキーは、ボルシチを残し、ステーキをちょっとだけ食べると、クッキーとチョコレートを手に取り、急いで外へ出た。彼は、ひょっとして、自分たちは別の人と間違われているのではと、びくびくしていたのだ。もちろん、僕たちは逃げ出さなかった。お腹いっぱい食べ、チョコレートとクッキーをポケットに入れてテーブルで待っていた。ウェイトレスが皿を片付けに来ると、僕たちは立ち上がり、礼をいって、ゆっくり一人ずつドアの方へと向かった。帽子は外に出てから被った。

ゲンカは牛のそばで僕たちを待っていた。

「大丈夫だった？」

「もちろん！」

僕たちは、草の上に寝そべってチョコレートを食べ始めた。みんながチョコレートを食べ終えると、ゲンカに対する腹立たしい気持ちはおさまっていた。トーリックがゲンカに説教を始めた。「いいか、今回は全員分の食券があったから、もともと問題はなかったんだ。でも、もし、全員分の食券がなったら？　一言の断りもなしで突然飛び出すなんて！　失礼だろ」

時々、一枚の食券で仲間と連れ立って入ることもある。それでも、それぞれにライス、スープ、

肉料理、ココアを出してもらっていた。クッキーとチョコレートだけは、全員に対し1枚だったけど、その他の料理はちゃんと人数分出してくれた。本来は、一枚の食券で三人前の料理を出すなどウェイトレスがしてはいけない。でも、実際は食後にも僕たちのことを気にかけてくれいた。

「ねえ、あんたたち、お腹はいっぱいになった？」

当時は戦後で、パンをお店で手に入れることも難しかった……。今ではもう過去のことだが。

今、僕たちは、学校のそばのベンチに腰掛け、飛行機が飛び立つのを見つめていた。

「ああ、今にもう一機飛び立つさ。飛行機は三機の編隊を組んでるんだ」

コーリャがいった。

次ぎはいつ飛び立つか見続けていたが、いくら待っても一向に飛び立つ気配はなかった。コーリャはいい訳をし始めた。

「飛んじゃいけないっていわれたんだよ。非常事態かなにかが起こったのさ」

その時、飛行機が食堂の上を滑りだし、それから、機体の後部がもち上り、ばーん、ばーん、と機体前部が屋根にぶつかってバウンドした。そして、少し跳ね上がって、何度かひっくり返った。機体から黒い点と線のような破片がぱーっと辺りに飛び散った。飛行機が墜落した場所からは、白い煙が立ち昇っていた。煙は、もくもくと昇り、真っ白な雲のようだった。

「だからいったじゃないか、非常事態だって！」

もう、コーリャの言葉など聞いていなかった。僕たちは、飛行機の方に駈けて行った。後から、何人かの学生も追いかけてきた。兵士もどこからか姿を現した。軍の消防隊や救急隊が僕らを追い越していった。走ってくる人たちの数は増え、真っ白な煙は勢いを増していた。煙は僕たちの方に流れてきた。少し煙たかったが、怖くはなかった。ワクワクするゲームに参加しているような気分だった。

墜落現場から半キロのところで、パトロール隊に止められた。飛行機は、エディックと一緒によく牛の放牧していた、まさにその窪地近くに墜落したのだった。僕たちはそこで止められたが、学校に戻ろうとはしなかった。少し後ろの方にさがり、機体が燃える様子を眺めていた。隣には、何人かの兵士が並んでその様子を見入っていた。そのうちの一人が、コーリャと同じことをいった。

「駐屯基地と周辺全土の非常事態だ！」

煙はどんどんと立ち込めていた。炎も上り始めていた。煙はもっと濃くなり、すごい勢いで真っ黒になっていた。バン！　その音に驚いて体を屈めた。

「タンクが爆発したぞ！　ああ、一巻の終わりだ！」

兵士の声が聞こえ、そのうちの一人が僕たちに向かっていった。

「おい、とっとと帰れ！」

僕たちは、むっとしたりはしなかった。黙って立ち去った。

学校には、チャイムと同時に着いた。あんな出来事の後では、遅れてもちっとも怖くはなかった。たとえ、次の授業が校長のミハイル・ミハイロヴィチ先生の歴史だったとしても。僕たちは、ゆっくりと席についた。最初、静かに座っていたが、ミハイル・ミハイロヴィチ先生がなかなか来ないので、事故について話し始めた。目撃者である僕たちは、どんな様子だったか、みんなから質問攻めにあった。ただ、スヴェトラーナだけがなにも尋ねようとはしなかった。彼女は、不自然なまでに、背筋をまっすぐに伸ばして座り、硬直したように一点をじっと見つめていた。僕は、なにか不吉なものを感じた。

「スヴェトラーナ、なにかあったのかい？　顔色が悪いよ！」

しかし、彼女は僕のいうことも耳に入らない様子で、一点を見続けていた。彼女の額には、緊張のあまり汗がにじみ出て、頬は真赤になっていた。クラスは静かになり、スヴェトラーナに視線が集まった。彼女は、下唇を噛みしめたまま、静まりかえった教室にも、みんなの視線にもまったく気付いていない様子だった。

「ねえ、みんな！」スヴェトラーナは、唇だけを動かして静かにいった。

「怖いの。そこに私の、私の……」

みんなが、彼女がいおうとしていることを理解した。彼女を落ち着かせようとしたが、相変わらず、あの呪われた一点をずっと見続けていた。僕は鳥肌が立ち、気持ちが悪くなった。と、そこへ、校長のミハイル・ミハイロヴィチ先生が入ってきた。僕たちが起立する間もなく、校長

先生はいった。

「みなさん、席につくように！　席について！」

みんなは席についたが、スヴェトラーナだけは立ったまま、一点から目を離すことができずにいた。彼女の頬は、すでに赤味を失い、蠟のように真っ青になっていた。校長先生は、彼女にゆっくりと近づき、優しくいった。

「スヴェトラーナ、君のママが家で待っているよ。早くお帰り」

僕が窓の外を見ると、緑色の車「パベーダ」がスヴェトラーナを乗せて走り去った。

校長先生は、出席簿も開かずに、第二次世界大戦の話を始めた。はじめは、それに苛立ちを感じた。《なぜ、こんな時にいつも通り授業をしないんだ、どうせ、落ち着かせようとしているんだろう……。そのうち、ソビエトの英雄主義について話し始めるだろう》

校長先生は、本当にレニングラードの攻防戦について話し始めた。先生と目が合った途端、先生はすぐに視線をそらしたが、その瞳には悲しみの色が表れていた。

《実際、先生にできることってなんだろう？　先生だって僕たちと変わらない、ただ、長く生きてきて、たくさんのことを見てきただけだ。僕たちを慰めようとすることが、そんなに悪いことか？》

「校長先生、家に帰ってもいいですか？」

みんなは驚いて、互いに視線を合わせた。僕は気まずくなった。

「ああ、いいよ。いいよ。帰りなさい。グプキン君」

先生は、まるで大分前から僕を帰そうと決めていて、僕がそう申し出るのを待っていたかのようにいった。

その後、僕はすぐには家に帰らず、基地内の公園へと向かった。ポプラの木は、まだ芽吹いてはいなかったが、若枝はうっすらと青みがかっていた。雪はふんわりとし、僕は寒さを感じなかった。雪玉をまーるく作るのは簡単だったが、投げる気にはならなかった。白い玉を枝にのせると、それは、皮をむいたリンゴのように見えた。夏のダンス広場にあるベンチに腰かけた。陽射しを浴びて、雪が融けた床板からは木の香がした。春はすぐそこに感じられた。《どうして？　僕も、エディックも、そして、僕の愛する人々もみんな生きている。でもスヴェトラーナは違う》。スヴェトラーナの家で、今なにが起こっているのか、自分のことのように感じた。気が動転した。《結局、人は誰もいつかは親しい人を失う。……僕がいいたいのはそんな事じゃない。この地球上で人が亡くなるたびに、愛も無くなる》。この言葉をどこかで読んだか、それとも自分が思いついたのか、どちらでもいい！　これが現実で、受け入れるしかないんだ……。

いいや、僕は反対だ！　そんなの嘘だ！　誰かを失なうたび、人はより強く愛さなければならないんだ。そうすれば、地球にある愛は、決して無くなることはない。

スヴェトラーナのためになにかしなければ。今すぐ、急いでしなければ、彼女が私の……気づくように。でも、なにをやればいいのか。キューピッドのお人形でも贈ろうか？　そうだ、彼

女といっしょに店で見た、あの微笑んでいるキューピッドがいいかも知れない。

「ヴァレーラ、ねえ、見て。なんて陽気な人形でしょう。こんな人形といっしょだったら、いつも楽しいわね……」

その時、彼女の瞳はきらきらと輝いていた。その後、スヴェトラーナが駈け出したので、彼女のあとを追いかけ後ろから抱きしめたが、彼女はそれを振り払わなかった。その夜、家で、自然と詩ができた。

私の横に座るキューピッド
座るキューピッド
その身からあふれだす　やすらぎと
出会いの喜び
蝙蝠が目を覚ましたとたん
目を覚ましたとたん
銀色の屋根をつたわる月明かりの道を
君のもとへと彼（キュービッド）は戻る
私はずっと待っていた、やっと彼は帰ってきた
私はずっと待っていた

私にすばらし人生を教え
そして、責任を自覚させるために
私は見た　夜が星をともし
私は見た　その夜
月明かりの道を、錫杖を手に
急ぐキューピッドを…

キューピッドの人形をどうしようか？　プレゼントしようか？　当然だ！　そして、詩も贈ろう。絵葉書に詩を書いて、小包に入れよう。彼女は明日、学校に来ないだろうから。そうだ、小包を送る。いい考えだ！

三時に家に戻った。犬のインドゥスは、僕を出迎えるとしっぽを振ってとび跳ね、前足をコートに二度もくっつけた。

「あっちいけよ！」ドアがなかなか開かなかったので、インドゥスをどけなければならなかった。

犬のインドゥスは、しょんぼりして犬小屋にもぐりこんだ。僕は部屋に入り、鏡の後ろにある貯金箱を取り出し、十五分後には店にいた。人形を包むのを郵便局の電報員が手伝ってくれた。今すぐ、ここで小包にスタンプを押してくれるよう頼んだ。

「今日、届きますか？」

電報員は、半ばあきれた顔で僕を見た。

「自分で届けるならね……」

彼女に馬鹿にされた気がして、外に駈けだした。南から生温かい風が吹いていた。コートのボタンをはずし、帽子を脱いだ。駐屯基地通りは乾いていた。小道を登って通りに出て、思い切り靴を地面に叩きつけて、泥をおとした。春、早春の訪れだった。飛行機事故さえなければ、今日は最高の日だったろう。もし、飛行機事故さえなければ……もし、事故さえ……。

宿題でもなんでもいいから、なにかしていないと……。家に帰ると、インドゥスの首輪をはずして、撫でてやった。宿題をする気にはぜんぜんなれなかった。

……その夜、僕はいろんな夢を見た。みんなと手をつないで歩いているようだ。みんな、クラスの仲間と先生たち、それに父さんや母さん、オーリャ姉さんもいた。草原にふりそそぐ太陽の光を浴びながら、ヒバリが舞っていた。草原一面に花が咲き乱れていた。突然、太陽が黒ずみ、空が暗くなった……見ると、それは太陽ではなく飛行機が墜落したのだった。鬱蒼とした森が、いきなり僕たちの目の前に現れた。みんなが僕に訊ねた。

「どうやってみんな一緒に手をつないだまま、森を通ることができるの？　仕方ないよ。もう飛行機は墜落したんだ、どんなに頑張っても、愛は無くなったんだよ！」

「それでも、行くんだ」

大勢が、僕のことを非難した。ゲンカ・ロゴジンスキーは僕に文句をいいだした。
「お前は、空想家、ほら吹きだよ」
ゲンカには賛成できない、みんなの前に出た。
「なにも無くなってなんかないんだよ！　さあ、みんな、一緒に手と手をつないで前に進もう。それぞれが勝手にばらばらに歩いたら、迷子になってしまう。僕が先頭を歩くよ。僕の後ろにエディック、その後にはスヴェトラーナが続くんだ」

迷える子羊たちよ！　汝、恐るるなかれ、さあ、手を取り、我に従わん！　さらば救われん！

すると、太陽も、ヒバリも草原も、花々も姿を現した。

僕を起こしたのはエディックだった。空が白みかけた頃、僕のところに飛んできていった。
「いっしょに宿題をしないか」
「急にどうしたんだよ？」
「別にどうってこともないんだけど……。もうすぐ学期末だし、そろそろ本腰を入れないとね」
僕は、微笑んだ。《エディックはいいヤツだ》。宿題が気がかりではなくて、僕のことを心配して、朝も早いのに駈けつけたのだ。

「なあ、エディック、分かってるよ。芝居はもうやめよう。君の代数と物理のノートをすぐに写させてくれないか」
「ずるいなぁ、君は！　すぐにだなんて！」
エディックもそういいながら笑うと、鞄からノートを取り出した。
「昨日、どこにいたんだい？」
「どこにも」
「話してくれよ！　じゃあ店にいたのはどこの誰だよ？」
「スヴェトラーナへのプレゼントを買っていたんだ」
「そうか……」エディックは、真面目な顔をした。僕たちは、黙りこんだ。
「書き写すの、やめるよ」
「どうして？」
「やっぱり、学校には行かない……。気が乗らないんだ」
「どこに行くんだい？」とエディックはすぐに尋ねた。
「川に行こう。ネコヤナギの枝を取ってこよう。女の子たちが明日、小躍りして喜ぶよ」
僕たちは、ぬかるんだ泥のなかを垣根つたいに歩いて行った。水溜りも雪解けの細流も濁り、また深かった。僕は何度かエディックを背負って進んだ。エディックはくすっと笑った。
「さあ、兄さんたち、助けてくれ！」

エディックは、僕のゴム長靴のことを兄さんたちと呼んだ。精米工場の近くを通って川に出た。山のように積まれたオレンジ色の籾殻の一部は、川に浸かっていた。エディックが、両手で望遠鏡の形をつくっていった。

「奴らのことはお見通しだ、白いインディアンカヌーに乗っている。兵曹長、鉄の星から来た異星人を確認してるか？」

「船長、お待ちください」。僕は、さっと鞄を開くと、最初に手で掴んだノートを取り出し、それで望遠鏡を作った。

「私の放射線測定器をお使いください。彼らはわれわれをアルファ線で攻撃しようとたくらんでいる気がします」

「心配するな、兵曹長。すでに防衛スクリーンを作動している。放射線測定器などしまえ。物理の授業ではないんだ」

僕がノートを見ると、それは物理のノートだった。

「船長、貴殿の卓越したご見識、恐れ入りました」

「たいしたことではない！」。エディックは、鞄を放り出しコートを脱いだ。

「私がケンタウルス座アルファ星で演習をしていた時、同じようなことがあったのだ。今、大事なのは一隻でも敵船を乗っ取ることだ」

エディックは、丁寧にコートを置くと、川の急カーブまで下りていった。

「船長、ご進言申し上げます。学術委員会も、船長自らが、このような危険を冒すことを許しません」。エディックは足を止め、僕も立ち止まってコートを脱いだ。
「わかる、よくわかるよ。私も君の年頃には、同じように熱血漢だった……見たまえ！」。エディックは、川のカーブにとどまっているうごめく氷の塊を示した。
「了解。われわれは一番大きな敵のカヌーを奪い取って、外洋に出なければいけませんね？」
「兵曹長、学術委員会が、君の脳を電子頭脳に換えたことは正解だった」
エディックは役になりきっていて、その声には威圧するような金属的な響きすらあった。
「はい、船長、学術委員会は、将来、私が誰に師事するかを知っていましたので」。僕は川に近づき、足で氷を蹴った。氷は岸から少し離れては、また戻った。
「船長、銛が必要です」
「捕獲砲のことをいっているのか？　兵曹長」
僕たちは、レンガの煙突近くにあったクズ山から、二本の長い竿を引っ張り出してきた。
「『青き蘇生』戦の終了後、ここに捕獲砲を残すことにしよう」
「はい、船長……」
板氷に飛び乗ると、僕たちは竿を使って岸辺から離れ、『青き蘇生』作戦が開始された。細かな氷が、僕たちの氷の『カヌー』にぶつかりながら、音を立てて砕けた。エディックは、船首側のブリッジに立った。

「兵曹長、異星人がわれわれを狙って装甲カメを送り出したぞ……　大砲を準備しろ！」
ずっしりとした氷の重さで、僕たちの竿は折れそうに撓み、竿先が折れた。
「船長、怪物の動きはのろいから、その間をぬって進みましょう」
「そうだな」僕たちは氷の『カヌー』を急流へと進めた。
「船長、『青い森』を通り過ぎないようにしなければ」
「心配するな。速度を上げ、川のカーブを曲がれば、森につくだろう」
僕たちは、板氷の左舷から浮かんできた黒ずんだ氷を竿で突いて、急流にのった。『カヌー』は一八０度回転し、今度はエディックが後ろになった。
「船長、私が操縦しましょう。船舶機器が壊れましたので」
「あわてることはない、兵曹長、流れを上手く利用するのだ」
僕は、川の深さを竿で測ろうとしたが、竿は川底に届かなかった。板氷の端に水しぶきがあがり、ばしゃばしゃと音を立てた。
板氷は、スピードを速めた。『青き蘇生』作戦は、深刻な局面を迎えた。
「エディック、もうやめよう。カーブで流木なんかにぶつかったら、僕たちは一巻の終わりだ」
「そうだな、兵曹長」
僕たちは、竿で漕ぎ始めた。僕は、ふたたび竿で川底をさぐってみたが、やっぱり無理だった。板氷はスピードをますます増していった。

「やめ！」。エディックは、いった。
「力を残しておかなければならない。運にまかせよう」
「船長、ごもっともです。座りましょう」
僕たちは竿を引き上げ、しゃがんだ。二人ともすでに、くるぶしまで水に浸かっていた。
「長靴を脱ごうか？　でないと動きにくいや」。僕は、そういうと、長靴の紐をゆるめた。
「このまま少し待つことにしよう」
じっと前方を見ていると、板氷が回り始めた。息をころして、バランスよく竿を握り、いつでも流木を避けられるように構えていた。僕は丘の方を見た。丘は、ゆっくりと後方へと流れて行った。
「ちゃんと前を見てろよ！」
エディックは、川のカーブに近づくのを待っていた。氷からぶくぶくという音とともに気泡が立ち、まるで水が沸いているように感じた。
雨雲の影から太陽が姿を見せた。水は銀色に光りだした。
「茂みまでせいぜい、六十メートルほどかな」。エディックがいった。
「そんなこと、誰が判るんだ。茂みのとこだって、足がつかないほど深いかもしれない」
「そんなことはないさ」
足がしびれてきた。立ち上ろうとした途端、氷の下でなにかが動いて、軋む音がした。氷の

右端が水面から浮かび上がった。氷が傾き、エディックは体勢を崩して四つん這いになった。そして、彼の頭が僕の胸にぶつかった。

「気をつけろ！」。僕はエディックの肩をつかんだ。僕たちは、滑り台から落ちるように、ゆっくりと傾いた氷から滑り落ちていった。氷の下で、ふたたびなにかが動いて、後から鈍い音が聞こえた。

「伏せろ！」。エディックの視線が凍りついた。胸元やブーツの中に冷たい泥水が入った。あまりの冷たさに、まな板の上で飛び跳ねている魚のように飛び上がった。板氷、正確にいえば、ほんのわずかに残った氷の塊は、水平にゆっくりと急流を離れ、茂みへと流れていった。最初にわれに返ったのはエディックだった。頭を振ると、仰々しくいった。

「異星人との戦いは終わったようだ」

「はい、船長。こちらに捕獲砲が……。ねえ、エディック、僕、少し寒いよ」

「僕も、歯ががちがちいっている……。茂みまで行こう、あそこなら一番深くても腰くらいまでだろうから」

「氷の上を渡って歩こうか……ネコヤナギの枝は取っていく？」

「兵曹長！」。呼びかけた言葉は、うまく声にならなかった。

「エディック、もういいよ。異星人だとか、なんだとか、もういいよ。あそこの端に立って」

僕は氷に座り、足を水面に降ろした。それから川底に立った。六角形になってしまった僕た

ちの氷のカヌーを、岸に向けて勢いよく押す。そして、氷に飛び乗って、またすぐにぽんと降りた。カヌーは氷で覆われたネコヤナギの茂みにぶつかった。

ネコヤナギを集めながら、氷の塊の上をつたって、軽々と地面に這い上がった。

体が寒さで震えだした。

「さあ、早く行こうよ。じゃないと凍え死にそうだ！」

家に戻り、洋服を干して、二人でペチカの傍に座った。炎が勢いよく上がり、薪がぱちぱちと音を立てるたび、赤い火花が煙とともに煙突の中に舞い上がっていた。

「ヴァレーラ、嫌だったら別に話さなくていいけど……。スヴェトラーナとはどこまでいったんだい？」

「いきなりなんだよ」

エディックは、ペチカに薪をくべた。火花がレンガを這うように、ぱっと燃え上ると煙突へと消えていった。

「いきなりなんだよ」。僕はくり返した。

「べつに、どうってことはないけど……。学校の用務員のカピトーノヴナおばさんが君の噂話をしてたから」

「どんな噂？」

「僕が、授業中にチョークを取りに行ったのを覚えているかい？　職員室に入ると、カピトー

ノヴナが窓を拭いていたんだ。『……あれはましな方ですよ。生徒たちときたら、夕方には教室がゴミだらけなんですから』

ヴァレーラ、君も、あの国語の女教師の意地悪な性格を知っているだろう……。

『ナジェージダ・カピトーノヴナ、それより、教室を散らかす犯人をはっきりいってください』『でも、多すぎて、一人一人の名前なんか憶えていられませんよ。一日に会う生徒の数っていったら……ああ、目まいがするわ。昨日、九年B組の教室に入ろうとしたら……』

あの女教師ときたら、自分の担任クラスの話しが始まったから、体を強ばらせてさ……。『ドアが閉まっていたので、鍵を開けて入ろうとしたんです。そうしたら、あの子たちは教室内側のドアの取っ手に椅子の脚を入れて……。あの子、なんていったかしら、赤毛の、いつも詩を読んでいる……』

『グプキンのことですか？』『そう、そう。私が教室に入ったら、彼は彼女を隠そうとして、でも、私、見たのよ、彼女が顔を紅潮させて、制服の前は皺くちゃになっていたの。なんてふしだらなのって私いったら、彼女は慌てて飛び出していったわ。えっと、あの彼はなんといったかしら……』

そこで、国語の女教師が僕に気づいて、『ヴォスコボイニコフ君、なんの用かしら？』って。それで、僕はチョークをもらって、出てきたんだ。

エディックはまだなにか隠しているようだったが、話してくれた内容だけでも、僕を怒らせ

るには十分だった。正直、こんなばかげたでっち上げで、自分がここまで腹を立てるとは思っていなかった。

「ああ、こっちだって用務員のカピトーノヴナに関しては、いいたいこといっぱいあるけど、ばからしいからやめとくよ」

「僕は、興奮してじっとしていられなかったよ」

「実際はぜんぜん違うんだ。僕たちは、幾何の宿題をやってただけなんだ。でも、一年生が覗いたり、邪魔したりして……。僕なんて、暗くなったのにも気付かなかったぐらいだから」

「それで、彼女にキスしたことあるのか？　正直に答えろよ」

「ああ、でも教室じゃないよ。二月だった。ソビエト軍の記念日にね」

エディックは、なぜか溜息をついた。

「カピトーノヴナなんか、気にするな。くそ！　あいつ頭がおかしいんだよ」

「まあ、それとこれとは関係ないよ……。国語の女教師だけど……。おととい、あいつに挨拶したら、『グプキン君、私を送ってくれないかしら？』っていったんだ。あいつ、なにかいいたげに薄笑いを浮かべてたよ。僕は、『はい、いいですよ！』っていったんだけど、途中いきなり、ついさっきスヴェトラーナの母親と話をしたといい始めたのさ。

「ヴァレーラ、気にするなって！」

「そうじゃないんだ。自分はどうでもいい……。もし国語の女教師がなにかいったら……。考

えるだけで怖いよ！　スヴェトラーナは、そうでなくても大変なんだから……」
「気にするなよ。三月八日の国際婦人デー[6]に彼女に贈るプレゼントを考えた方がましさ」
「もう、小包を送ったよ。昨日にね」
「そうか、それは良かった」。エディックは、乾かしていたズボンを洗濯ひもから外し、はいた。
「僕はヤグヌィシェワにでもラブレターを送っておこうかな」
「え？　どういうこと？」
「うーん、あと、トーリックやコーリャも誰かにラブレターを出したら、すごいことになるぞ。そうしたら、君たち二人の事なんて誰もなにもいわなくなるだろう。男子４人がそれぞれ女子４人に送ったら、クラスの半分じゃないか。そうしたら、個人的な事じゃなくて、クラス全体の現象になるからさ」
　エディックは、そういうと、鞄を手にとって付け加えた。
「一番初めに恐れをなすのは、国語の女教師さ。すべてを隠すに決まってるよ。だって、なにかあったら、クラス担任に最初にお咎めがあるからね」
　エディックはそういって目くばせした。
「じゃあな。兵曹長！」
　僕たちは握手をして別れた。エディックは帰り際、垣根の木戸を閉めながらいってくれた。
「気にするんじゃないぞ、ばかげたことなんて！　明日、ネコヤナギを持ってきてくれ。僕は

6《国際婦人デー》ロシアでは祭日となっていて、男性から女性に花束やプレゼントを贈る習慣がある。

花瓶を六個ほど持ってくるから」。エディックは、もう一度めくばせすると、ふたたび握手を交わした。

なんだか、気持ちが軽くなった。それで、ムクドリの巣箱の手入れでもしようか思った。

五時過ぎ、母さんが仕事から帰宅した。僕の様子を見ると、母さんはいった。

「まあ、驚きね。大雪でも降るんじゃないかしら！」

母は、夏に使用する屋外の炊事場の傍にあるベンチに腰掛けた。僕は玄関先に座りながら、巣箱の修理をしていた。

「牛の世話はちゃんと出来た？」

「牛の世話なんて、難しい事ないだろう？　納屋の掃除もしたし、干し草も敷いたよ」

母さんは溜息をつくと、巣箱を修理している様子を眺めていた。

「お前のムクドリの巣には、どういう訳か、雀だって住まないよ」

母さんは、僕のことをからかおうとしているのだった。

「もしかしたら、手入れの仕方が悪いんじゃないの？　父さんに聞いてみたら？」

「自分でできるよ」

その言葉に、母さんがなにか感じ入っていることを視線の端に見てとった。僕は、鉄鎚を横に置くと立ち上がり、少し体操をして体をほぐした。母さんはなにを思ったのだろう？　僕がすっかり成長したとでも？

「背丈は父さんに追いついたといっても、まだ考えることは幼稚ね」
母さんは、突然、そういった。
「幼稚だって！　ほら、見てよ、僕が設計した巣箱を！」
むきになって見せたけど、正直、父さんの背丈に追いついたといわれて嬉しかった。
母さんは微笑んでいた。突然、僕の目に、綿入りの上着にぶかぶかのゴム靴を履いて、小さくて、華奢な母の姿が映った。後ろにずれたスカーフから、まばらに白い髪がのぞいていた。髪の半分は白髪になっていて、顔にはたくさんのしわが刻まれていた。
「母さん、なんて小さいの！」
母さんはしょんぼりした。これ以上なにかいったら、母さんは、こらえきれず泣き出してしまうに違いなかった。母さんの神経はとても繊細だった。僕はバーベルを持ち上げ、乱暴に地面に置いた。バーベルの重りの代用として、取り付けたコンバインのタイヤが、ガシャンと音をたてて外れると、僕は勢いよく叫んだ。
「母さん、大丈夫だよ。母さんは小さいけど、僕は体が大きいから。僕が、たった一回、熊手で干草をすくい上げると、朝まで充分もつ量の干草を牛にあたえられるんだから」
僕は、庭と干し草置き場を隔てている柵を勢いよく飛び越えると、干し草置き場へと駈けていった。
この時、母さんがなにを思ったか、僕が分からないとでも思うだろうか？　おそらく、「背丈

は父さんに追いついても、まだ考えることは幼稚ね」と思ったにちがいない。でも、母さんがそう思うのは、僕がいい気にならないためかも。《父さんの身長に追い付いたと同時に、頭も同じように賢くなることがあるだろうか？》。母さんはわざとそういったのだろう。なぜなら、言葉にしなくても、親の考えが、自然と子供に伝わることはしばしばあるから。母さんは、僕に伝わっていると思ってるに違いない。

八時過ぎ、父さんが仕事から帰ってきた。台所には、おいしそうな夕食の匂いが漂っていた。それは、僕の部屋まで届いていたが、気づかないふりをした。父さんが顔を洗って、僕の部屋をのぞいたが、宿題をしているふりをして、じっと本を見ていた。《そっとしておこう。勉強させておけばいい、ご飯の後でも話をしよう》と、父は思うのだった。

実際、僕には、父さんや母さんの気持ちが理解できる。ただ、気づかないふりをしているだけだ。十分ほどして、台所から話し声が聞こえてきた。水でも飲みに行くふりをして、誰が来たのか見てみようと思った。立ち上がると、こんな会話が聞こえてきた。

「成績は優秀ですし、才能あるお子さんだと思いますが、でも、最近……」

国語の女教師だ！

「……授業に遅れるようになったんですよ。私が思うに、なにかに熱を上げているようで、そのことが……」

女教師が声をひそめたので、その先は聞きとれなかった。ドアに近づいて、彼女がいっている

ことを聞こうと思ったが、絶対に聞くものかと思いとどまった。チェーホフの短編小説『箱に入った男』を声に出して読み始めた。読んでいる最中も頭を離れなかった。《用務員のカピトーノヴナとの一件を、しゃべりはしないだろうな？　飛行機のことはすだろう……。それについては話すのが当たり前だ。でも、カピトーノヴナとのことも話す必要があるだろうか？　僕は自分のことを気にしているんじゃない！　自分のことじゃないんだ……》

「ヴァレーラ、ご飯だ」、父さんの呼ぶ声がした。

その声を聞いて、父さんが怒ってはいないのが分かった。僕は、いつも通り、父さんの右側に座り、母さんが左側に座った。テーブルにはまだ五人ほど座れるスペースがあった。食卓は大きかったが、お祝い事の時に親戚が集まると、これでも手狭になった。そんな時には、僕の部屋からもう一つのテーブルを引っ張り出してきた。

僕は、スープをすするといった。

「あの真っ白い雄鶏をしめちゃったの？」

父さんが黙っていると、母さんが答えた。

「そうよ、そうよ、さあ食べなさい！」

僕は、スープを飲み始めた。それから、父さんは、玉ネギを切って、僕の皿に少し置いた。僕はなにもいわなかったが、それを見て母さんは、玉ネギを食べると心臓が痛くなるといった。

「それは、玉ネギのせいじゃなくて、天候の変化のせいだろう」と、父さんがいった。

僕は、母さんとの会話を思い出して、父さんに聞いた。
「本当に大雪が降るのかな？」
「もうさすがに、降らないだろうな」
「ドゥボヴィクじいさんに聞いたけど、一週間もしたら、りんご園の雪囲いを外すだろうといっていたよ」
食事中、父さんと交わした会話はそれだけだった。また、父さんと話し始めたのは、母さんが皿を片づけ、テーブルをきれいにしてからだった。それが、わがが家の決りだった。僕と父さんが話す時は、母さんが横に座って、編み物でもするのが常だった。母さんは、二人の会話を聞かないふりをしていたが、鼻歌交じりになにかをしていても、実は、ちゃんと聞いていた。実際、僕たち二人の会話は、いつも、面白かった。
ムクドリや早い春の訪れについて話した後、父さんがいった。
「担任の、ライサ・コンスタンチノヴナ先生がいらしたぞ」
正直、僕は父さんがいつ先生の話しをきりだすかと気が気じゃなかった。しかし、予想に反して、父さんは、それだけ告げると、話題を変えた。
「ミハイル・ミハイロヴィチ校長と、コホルホーズ議長が市に出向いている……。もうじき、三月十日には新しい学校が開校するんだよ。お前たちの学校は……」というと、父さんは笑いだした。

「大学と同じくらい大きくて、一日では全教室を周りきれないくらいだものな」
「父さん、その学校の体育館を見た？」と、わくわくしながら聞いた。
「母さん、学校の体育館だけどね、ロボダンスカヤ教会のドームが全部入るくらい、大きいのさ」。父さんはそういうと、肘をテーブルにつき、額をハンカチで拭いた。母さんは、なぜか父さんの方を咎めるような様子で見たが、父さんは楽しそうに僕を見ていった。
「さあ、宿題を済ませろ。明日、朝早く、母さんと畑に行かなくちゃならんから」
父さんは、そういって席を立つと、寝室に入っていった。母さんは、不機嫌そうにテーブルに編みかけの肩掛けを置き、父さんの後を追った。
「お父さん、ちゃんとあの子に話しするように、お願いしたじゃありませんか」。部屋のドアがばたんと閉まった。国語の女教師はやっぱり話をしたに違いない。今に、二人の喧嘩が始まる……。
僕は、電気を消し、自分の部屋に入った。服を着たままベッドに横になると、自分自身のことや、スヴェトラーナのこと、彼女に起こった不幸などを考えた。

飛行機が墜落した。飛行機が粉々になると、夢もまた粉々になる、そんな言葉を本で読んだことがある。実際に身をもって体験すると、本など読まなくても、同じ思いに至るものだ。飛行機は銀色で、澄みきった青空には太陽が輝き、雪解けの細流は陽光に映えて、銀色に光りながら流れていた。あの時、僕は、雪解けの水の流れをみながら、溶けて流れる銀のようだと感じた。

三月五日、将校会館の大理石の円柱が並ぶ大広間には、すべての鏡に布[7]がかけられていた。旗の下には、三つの棺が置かれていた。黒いリボンがかけられ、中には土と混ざった人間の遺灰が入っていた。人間の遺灰は、土とは切っても切り離せない。学者の話では、地球は六十億年もの間存在し、人々は地球上で数百万年の間生きてきた。この長い年月の間、人々は生き、年老い、戦争あるいは事故で亡くなっていったが、いつも土へと葬られてきた。つまり、毎年、地球上に人間の一部がどんどん増えていることになる。おそらく、あらゆる一握りの土にもすでに人間の一部が含まれているのだ。

僕は、時折、牛を放牧している間、草の上に横になり、歩き回る蟻を眺めることがある。それに飽きると、ヒバリの群れを眺める。そして突然、心の底から歓喜が湧き上がり、大地を抱くように腕を大きく開くと、飛び上がり、大声で叫ぶ。「大地よ！　生命よ！」。

牛は頭を上げ、僕の方を見る。うちのロスカは、必ず頭を振ってから、ふたたびび草を食み始めるのだった。

スヴェトラーナの父さんの葬式が行われている間、僕は、これらのことをいろいろと思い出していた。スヴェトラーナの父さんは、もう草もヒバリも蟻の行進も目にすることはないのだ。ひどく悲しくなった。僕は、棺には近づかず、パイロットの古い墓の側に立っていた。その上には、墓碑のかわりにプロペラを載せた小さな矢倉があった。その青く塗られている鉄製の矢倉は、空の色と溶け合っていた。小隊の兵士は、騎兵銃をさっと構えると、勇敢なパイロットたち、そ

7　ロシアでは、人が亡くなった際、すべての鏡に布をかけて隠す慣わしがある

してスヴェトラーナの父さんの冥福を祈って、銃を三発鳴らした。埋葬式には、スヴェトラーナとその母親と共に、アルザマス市からやって来た叔母のクラウディア・イワーノヴナが参列していた。叔母さんとスヴェトラーナの母親は、喪服に身をつつみ、スヴェトラーナは、いつもと同じ緑色の、フード付きコートを着ていた。僕は、スヴェトラーナから目を離さなかった。スヴェトラーナの表情は厳しかったが、涙は流していなかった。彼女は叔母さんといっしょに母親の腕を支えていた。スヴェトラーナのお母さんは号泣し、幾度か気を失い倒れた。墓の上に土がもられた時には、泣きわめいた。

その様子を、ずっと横から見ていた僕は、我慢できずに、人を掻き分けてスヴェトラーナの傍に駆け寄った。彼女は、僕の姿を見るなり、胸に抱きつくと〝ワッ〟と泣き始めた。それからのことは、すべて夢の中の出来事のようだった。僕はどうやって家に帰ったかも憶えていなかった。憶えているのは、緑色のバスに乗って、スヴェトラーナといっしょに座っていたことだった。僕は、彼女の手を握っていた。その手は柔らかくて熱かった。彼女の家の玄関先にどうやって辿り着いたかさえも記憶に残っていない。傍らを人が通りすぎても、誰にも気付かなかった。

アパートのドアが開くと、叔母さんがスヴェトラーナを呼んだ。スヴェトラーナは鼻をすすり、僕の頬にキスをして中へと走っていった。叔母さんは、ドアを閉る時、僕を頭の先から足の先までじろじろと眺め、いぶかしげに頭を振った。僕は気に入らなかった。《僕がなにをしたというのだろう》。自分の服を見たが、コートはきれいだった。

これが、僕がはっきりと記憶しているすべてだ。他のことは、まるで夢のなかの出来事のようだった。

翌日、スヴェトラーナは学校に来た。女の子たちは、すぐに彼女を取り囲むと、あれこれと声をかけた。僕とエディックは、女の子たちに不満があるような口調でいった。

「ねえ、おしゃべりさんたち、彼女に鞄を置かしてやったらどうだい」

正直なところ、僕は、女の子たちがスヴェトラーナをとても気遣っていることが、嬉しかった。スヴェトラーナは、彼女たちに笑顔をみせ、窓辺に飾られた、若葉が芽吹くネコヤナギの枝に気づいて声を上げた。

「まあ、なんて素敵なの！」

その日、すべてが素晴らしかった。気に入らなかったのは、国語の女教師だけだった。彼女は、スヴェトラーナにチェーホフについて尋ねたとき、まるで病人でも見るかのような目つきでスヴェトラーナを見た。いかにスヴェトラーナの悲しみを深く理解しているか、また、クラスの生徒一人一人を気遣っているか、見せようとした。

「お座りなさい、スヴェトラーナ、評価〝5〟よ」

先生は、成績簿に長いことかけて、スヴェトラーナの点数を書いた。それが終わると僕の方を見ていった。

「グプキン君、あなたはなにか理解できましたか？」

僕は驚いて、起立もせずに答えた。
「いったいなんのことです？　今、理解に困るようなことはとくになかったと思うのですが」
「目上の人と話す時は、起立しなさい！」
「立ちますとも」。僕は、しぶしぶ起立した。
「あなたは、あまりにも自分に対して自信をもっているようね。作文はどれも〝3〟以上の評価はとれないでしょうに」
先生は、僕と話ながら、スヴェトラーナの方を見ていた。先生は、明らかに、スヴェトラーナの前で僕に恥をかかせたと思っていた。
「〝3〟は、別に悪い評価ではないはずです。僕だって、ある程度は理解できてます」
「そう、だからある程度の理解力なのよ！」
先生は、無理やり微笑んでみせたが、でも、本当は笑いたくはなかったのだろう。
「ライサ・コンスタンチノヴナ先生」僕も笑顔で応えた。
「先日、先生は、詩人のナドソンのことを話されましたね。でも、この詩人については、僕たちの授業要綱にはないものです。先生は、なにかひとつでも、彼の作品で暗唱できるものはありますか？　多分、おできにならないでしょうね。なぜなら、授業要綱で要求されていませんから」
普通なら、当然、教室は騒然となっていたことだろう。しかし、ちょうどその時、チャイムが鳴り、先生はいった。

「グプキン君、勉強以外のあなたの知識については、その内また話しましょう。たった今、気づいたわ。勉強以外のいろんなことについて、あなたと話し合わなくてもいいと思っていたのは、私の間違いだった、とね」

彼女は、成績簿をつかんで、そそくさと教室から出て行った。

二時限目の最中、エディックが僕をつついて、窓を見るようにあごで合図した。ちょうど、スヴェトラーナの叔母のクラウディア・イワーノヴナが、学校の門を通ってくるのが見えた。彼女は、氷が張っている水溜りをさけて、入口へと向かった。クラウディア叔母さんは黒い帽子に、冬・春兼用の地味なオーバー、左腕にはボルドー色の漆塗りのハンドバックを挟んでいた。

二時限目は物理。僕は、物理の授業が好きだった。つい最近、私とワシーリー・ペトローヴィチ先生、それに十年生の生徒の数人が、一緒にラジオを組み立てた。ワシーリー・ペトローヴィチ先生は、真空管について僕に質問をした。僕は、質問すら聞きのがしていた。

「グプキン君、どうしたんだ。寝てたのか？　黒板に真空管の回路図を書きなさい」

立ちあがって、黒板まで歩いている途中に、ドアが開いた。入ってきたのは国語の女教師だった。彼女は、ワシーリー・ペトローヴィチ先生に向かって、授業を中断したことを謝り、そして、僕に職員室に来るようにといった。

僕は、回路図を書き終えてから、職員室へと向かった。ドアは開いたままで、話し声が洩れてきた。

「もちろん、私としては、ライサ・コンスタンチヴナ先生に、ご面倒をおかけしたくはありませんでした、でも、アルザマスでも同じようなことがあったんです。どういうことになってしまったかというと……」

クラウディア叔母さんは、ドアのところに僕が立っているのを見て、話を止めた。国語の女教師はいった。

「さあ、ヴァレーラ、座りなさい」

「いいえ、大丈夫です。立っています」

そういうと同時に、教員机のインク壺の横に置かれた、明るく微笑んでいるキューピッド人形が目に入った。人形は、それはまるで、僕を励ましているようでもあり、あるいは、からかっているようでもあった。

僕の視線の先に気づいた先生は、

「グプキン君、正直に答えなさい。あなたは、自分のことを大人だと思っていますか？」

僕は、質問が聞き取れなかったふりをして、尋ねた。

「ライサ・コンスタンチノヴナ先生、お呼びでしょうか？」

先生の言葉をクラウディア叔母さんが遮った。

「ええ、呼びましたよ。ヴァレーラ」。叔母さんは、僕がまるで五歳の少女であるかのように、優しく愛情をこめた様子でいった。

「あなたとスヴェトラーナとの関係のことで話がありましたの」
「座りなさい」、先生は椅子をすすめた。人形が、真正面から僕を見ていた。
「グプキン君、私たちは全部知っているのよ。むしろ、あなたたちの友情を好ましいものだと思っているんですよ」
先生が、そこで少し間をおくと、かわりにクラウディア叔母さんが言葉を続けた。
「ただ、私たちは、あなたたちの関係の深さと、純粋さについて知りたいの。それを聞く権利ぐらい、あると思わない？」
僕は黙った。クラウディア叔母さんはため息をついた。
「じゃあ、いいわ。では聞くけど、いつだったか、夕方、教室に閉じこもっていたのはなぜ、教えてくれる？」
僕は顔を上げ、まっすぐに見つめた。先生とクラウディア叔母さんは、僕が話すのを待った。
「本当はぜんぜん違うんです…。間違ったことが伝えられたのです」
「では、どうだったのです？」
「ライサ・コンスタンチノヴナ先生、僕は、そんなこと話したくもありません！」
激しい口調になってしまったが、正直、意識的にしたわけではなく、そうなってしまったのだ。クラウディア叔母さんは動揺した。
「分かったわ、分かったわ、ヴァレーリー、答えなくていいわ」

彼女は、ハンドバッグを開けると、なにやら文字が書き込まれた紙を取り出した。

私の横に座るキューピッド
座るキューピッド
その身からあふれだす　やすらぎと
出会いの喜び
私はずっと待っていた、やっと彼は帰ってきた
私はずっと待っていた
私にすばらし人生を教え
そして、責任を自覚させるために

彼女が読み上げた詩は、なぜだか、違う意味をこめた風に聞こえた。詩を書いた僕でさえ、すぐに誰の詩か分からないほどだった。

クラウディア叔母さんが紙を置くと、ライサ・コンスタンチノヴナ先生はいった。

「素晴らしいわ！」と微笑んだ、彼女の笑顔を素敵だった。

「ヴァレーラ、責任について覚えておかなくてはいけない、と書いてるわね」

「ええ、そうです、ライサ先生。ですから、私が、今ここで読み上げたんですわ……」

「あなたにとって〝責任〟とは、よく勉強することだと私は思うわ。それが基本中の基本ですから」
「それから、ヴァレーラ。あなたは、異性との関係について、あまりにも急ぎすぎているのでは……」クラウディア叔母さんは、優しい口調でいったが、その表情は険しく、彼女が僕を軽蔑しているのを感じた。
「失礼していいでしょうか？」
僕はそういうと、許しも得ずに、ドアの方に向かっていった。
「グプキン、待ちなさい！　クラウディア叔母さんと私は、あなたとスヴェトラーナが、学校以外では会わないでもらいたいと思っているの。そして、このことは彼女には話さないで欲しいの。でないと……」
「でないと、なんなのですか？」
女教師は当惑し、アルザマスからやって来たクラウディア・イワーノヴナは、軽蔑の念も隠さずにいった。
「でなければ、私があの子をアルザマスへ連れて行きます」
彼女は、唇をかたく結んだ。
「グプキン君、あなたもお分かりでしょう、そろそろ学期末なのよ。それを待たずにあの子が転校することには私だって反対なの。あなた次第で状況は大きく変わるのよ。分かっているわね？」
職員室に用務員のおばさんが入ってきて、チャイムのベルを持っていった。僕は、叔母さん

の口元から目を離せずにいた。
「ライサ先生、僕は、みなさんのいうとおりにします」
僕は、用務員のおばさんの後に続いて職員室を出た。チャイムが鳴った。出会いがしらに低学年の生徒たちが飛び出してきた。僕は道を開けると、彼らはいっせいに外に出て行った。
教室で、みんなに囲まれた。
「ワシーリー・ペトローヴィチ先生がお前に〝5〟をつけたぞ」ゲンカ・ロゴジンスキーは、好奇心いっぱいで、みんなを押しのけると僕に質問した。
「なにがあったのさ？　どうして呼び出されたんだ？」
「べつに。大したことないよ」
教科書を鞄に入れると、そこにスヴェトラーナが近寄ってきた。
「なにか、深刻なことでもあったの？」
「いいや、べつに！」
僕は彼女に微笑むと、エディックが僕を廊下に連れ出した。
「なあ、正直にいえよ！　彼女が原因か？」
僕がうなずくと、エディックはいった。
「気を落とすな。今日、みんなで手紙を書くからさ」
「手紙って？」

「ラブレターさ」
エディックは、いたずらっぽく目で合図をした。
「ラブレターなんて出すなよ！　授業が終わったら、話そう」
僕たち二人を、ふたたび男子生徒たちが囲んだ。エディックがいった。
「簡潔にいう。誰にも一言もしゃべるな。ヴァレーラに、あの件で圧力がかかっている」
みんな、すぐにエディックの言葉を理解した。なんの件で圧力がかかっているのか、僕にすらはっきりとは分からなかったのだが。
授業が終わると、僕はエディックと一緒に学校を出た。スヴェトラーナも僕たちといっしょに行こうと駆け寄ってきたが、僕は彼女にいった。
「スヴェトラーナ、彼と話があるんだ……お元気で！」
へんてこりんないい方「お元気で！」は、自然に口からでてしまった。
スヴェトラーナは、僕にくるりと背を向け、なにもいわずに女の子たちのグループの方に走って行った。僕はやっとのことで自分を押さえた。僕は本当は彼女を引き止め、すべてを話したかった。《いや、よした方がいい！》、と自分にいい聞かせた。《この方がいいのさ。彼女のためなんだ……》
僕は、エディックを見た。エディックは振り返らずに、ゆっくりと基地内の公園のほうへ歩いていった。

「エディック！」彼は立ち止った。
「グプ　キーン　ヴォス　コー　ボーイ　ニーコーフ、あーすーはー　七日よー！」
女の子たちが、一斉に声をそろえてそう叫んだ。
エディックは、挨拶するように帽子を振り上げると、彼女たちは仲良く笑い声をあげて、鞄を振り上げた。
「ヴァレーラ、どうしたのさ？　スヴェトラーナと一緒に帰っても良かったのに」
「いや、いいんだ」
エディックは驚いた。僕は職員室での出来事を一語一句正確に話した。僕は一生、この話を忘れることはないだろうから。
「だから、もういいんだ……。ラブレターもなにも要らないよ。状況をもっと悪くするだけだ」
「じゃあ、どうしたらいいんだ？」
「べつになにもしないさ。このままでいいんだ」
「スヴェトラーナには近づかないのか？」
「ああ」
僕とエディックは、ずっと黙ったまま歩いた。それから、エディックが独り言のようにいった。
「もしかして、お前、自分の気持ちを勘違いしてるのか？」
「誰が勘違いしてるって……？」僕は立ち止った。

「怒るなよ」
エディックは、そういうと鞄を肩にかけ直した。
「べつに怒ってやしないさ……。もう学校には行かないよ」
エディックも立ち止った。
「お前、気でも狂ったのか？」
「むしろ、その逆だよ…。明日は、屋根裏部屋で過ごすことにする。祝日の後に、父さんにいうよ。国際婦人デーの祝日に、母さんの気分を台無しにしたくないからね」
突然の決心だった。でも、まさに、そうすべきだと感じたのだった。僕は、気が楽になった。
「まあ、いいさ。夜学に通うよ……。トラクターの作業員として働く。父さんのところで雇ってもらうさ」
「他に選択はないのか？」
「いや、もう決めたよ」
僕はエディックの肩をぽんと叩くと、いった。
「でも、勉強は続ける。お前も宿題を持ってきてくれ。クラスのみんなに、僕が学校には来たくないといってくれて構わないよ。でも、スヴェトラーナのことだけは、一言もいわないでくれ！」
「でも、やっぱり他に選択はないのか、ヴァレーラ？」
「見ろよ、車だ！」

将校会館のそばに、新車の「モスクヴィッチ」が止まっていた。僕たちは、車に近づくと、手で触ってみた。
「すげえや！　旧型とは大違いだ」　エディックは、車の周りを一周した。
「もし、学校に通い続けたら」と僕はいった。
「我慢できずに、彼女の傍にいってしまいそうなんだ」
「気に入ったかい？」、茶色の帽子を被り、冬・春兼用の青いコートを着た車の持ち主は、そういって車のドアを開け、運転席に座った。それから、窓を下ろし、頭を出していった。
「君たち、どこに行くんだい？」
「コルホーズの集会場まで」　とエディックが答えた。
「ということは、新しい学校までということかい？　さあ、乗って！」
僕たちが通りを進んでいる時、僕は尋ねた。
「どうして、道順をご存知なんですか？」
「僕は全部知っているよ……。明日、ここで一五時に君たちの学校の開校式が行われるだろう」
「えっ？　違いますよ。開校式は十日ですよ」
茶色の帽子を被った男は、バックミラーを直した。彼の目が笑っていた。
「かけようか？」
「いいですよ！」

「君の友達が証人だ」 男はふたたびバックミラーを直した。彼は、鏡越しにエディックを見ていた。

「君たち、どこで降ろしたらいいかな?」

「そこのポスターのところで」。エディックが、裁縫店のそばの門を指差した。茶色の帽子の男は、急ブレーキをかけた。別れ際に彼はいった。

「さあ、明日十五時というのを忘れないでくれたまえ。明日はお祭りだ。「新しい学校」っていうのもなかなかのプレゼントじゃないか」

「最高ですよ!」 エディックがいった。

「もちろん!」、帽子の男は、そういって笑うと、「モスクヴィッチ」は少し車体を沈めて、街道を走っていった。

「エディック、彼はいったい誰なんだろう?」

「さあ? 市から来た誰かかな……」

「でも、明日って本当かな? でも、どうして、誰もおしえてくれなかったんだろう?」

「間に合わなかったからかも知れない……。もしかしたら、本当にびっくりさせるためかも? ヴァレーラ、君はどうするんだ、来るだろう?」

「いいよ、後で教えてくれたらいいよ。じゃあ、僕は果樹園を通って帰るよ」

僕たちは、その場でおしゃべりをして、別れた。

三月八日、国際婦人デーのお祝いは、実際には七日から始る。男性が「祝日のはじまりをお祝いします！」[8]というと、女性は《ありがとう》と礼をいって、微笑むのだった。

七日の朝、近所の店の〝プレゼントコーナー〟の前に立っていると、こんな光景を目する。店に駈けこんできた男性の大半は、真っ先にレジへと駆け寄った。そして、彼らは香水のケースを抱えて走り出していった。行列に並んだ男たちが口喧嘩することもあった。そんな時、年配の女店員はこういうのだった。

「なにを騒いでいるのさ？　ここは、酒を買い求める人の行列じゃないんだよ」

列の男たちはおとなしくなる。支払済のレシートを店員に渡し、商品の受取りを待つばかりの客が遠慮がちにいった、「おっしゃるとおり！」。そして、「祝日、おめでとう！」とつづけて、晴れ晴れとした笑顔を浮かべて、出口へと向った。

朝は暖かかったが、太陽は見えなかった。他に用事もなかったので、家に向かってぶらぶらと歩いた。念のため、屋根裏部屋に隠れていよう。急に午後が半休になって、母さんが早く帰ってくるかも知れない。明日は、なんといっても祝日なのだから。

僕は、屋根裏部屋で、古い擦り切れた毛皮のコートを敷くと横になった。足もとには、昨年採れたにんにくの束や、黄ばんだ古本の山が雑然と散らかっていた。これら古本の山は、僕の日記「若き自然主義者の手記」のノートを探していた時に、樽から出してここに置いたものだった。

8　祝日（例えば、お正月・戦勝記念日・三月八日の国際婦人デー）の数日前から挨拶として人々が交わす言葉。常とう句。

それにしても、本当に今日が新しい学校の開校式なのか、それともあの「モスクヴィチ」を運転していた男が、僕たちをからかっただけなのか。おそらく、そこには、精米工場の吹奏楽団か、僕たちのコルホーズ・クラブの音楽団が呼ばれるはずだった。授業の最後に、女の子たちはみんな、お祝いされるだろうが、スヴェトラーナは、その時、僕のことを思い出すだろう……。そうしたら、きっとエディックに僕がいない理由を尋ねるにちがいない……。

僕は、ぎいっという垣根の木戸が開く音で目覚めた。

「ヴァレーラ、早く出てこいよ、どこなんだ?」。小声で僕を呼ぶ、エディックの声が僕を不安にさせた。

なにかが起きたんだ……

僕は、屋根裏部屋の小窓から顔を出すと、叫んだ。

「なんの騒ぎなんだ、船長?」

犬のインドゥスを追い払うと、エディックは野外の炊事場の方へと向かった。僕を見るや、彼は怒りをぶちまけた。

「早く下りてこいよ!」

僕は、小窓から離れると、梁にひっかからないように体をかがめた。僕が大股で駆けるたびに、家中が、どしんどしんといった。部屋中、埃が雲のように舞い上がった。屋根裏部屋を出るまでに、二度もくしゃみをした。

「なにかあったんだ？」
「座れよ」。エディックは玄関先に腰を下ろすと、僕が隣に座るのを待った。
「これから、学校の開校式が始まるよ。昨日会った茶色の帽子の男は、市から来た大勢の代表団の一人だった」
インドゥスは、鎖をがちゃがちゃ鳴らすと僕たちの間にもぐりこんできた。僕とエディックは、インドゥスを撫でてやった。
「今日は授業が二つだけだった。それから新しい学校を見に行ったんだ」
エディックは口をつぐむと、またインドゥスを撫で始めた。インドゥスは耳を垂れて、鼻を上に向け、気持ちよさそうに目を瞑った。黙り込んで、インドゥスを撫でているエディックをみて、僕はひどく不安になった。
「スヴェトラーナはいた？」、僕は、我慢できずにそう尋ねた。
「彼女は見ていない。コリカが二時限目の後、いったん家に帰ったんだけど、さっき走ってきていうんだ、彼女が自殺しようとしたらしい。
「なに！」 僕は飛び上がった。
「お酢を飲んだんだ……。ヴァレーラ、座れよ」、エディックは僕の腕を掴んでいった。
「今、彼女は市の病院にいる。君だって知ってるだろう、あそこの医者は優秀だよ！ まあ、おちつけよ！ バイクに乗ってきたから、二十分もあれば病院には着けるよ」

「そんな、慰めなんていらないよ！　やめてくれ！」

僕は、怒りで一杯になった、みんなに対する、そしてすべてに対する、この僕のめちゃくちゃな人生に対する怒り。辛いとかそんなんじゃない、無力感、絶望的なまでの……エディックがそばにいなければ、泣き叫んだだろう。

「お願いだ、慰めはなんかいらない。教えてくれ、どうして彼女が酢を飲んだのかを？」

僕は、突然、笑いだした、自分でもなぜだかわからずに。エディックは目を丸くした。自分が怖くなった。いったい、僕はどうしてしまったんだ……？　体が震えだし、もう少しで泣き崩れそうになった。そうならないために、僕はそこを離れ、木戸の方へと走って行った。そばにバイクが止まっていた。

エディックは、真っ青になって道を遮った。

「ヴァレーラ！　ヴァレーラ！　お前、そんな状態で行けるわけがないだろう！」

「行けるさ！　もう、落ち着いたから」僕はエディックを押しのけ、通りに出た。

「なぜ、彼女はそんなことを？　話してくれよ、頼む、話せよ。もう、落ち着いたっていっただろう」

僕は、バイクのそばに腰を下ろすと、見つけた小枝で、地面に丸や三角の模様を書き始めた。

「昨日、彼女の家で、叔母さんと一悶着あったんだ」。エディックはジャケットのポケットから手拭いを取り出すと、しゃがんだ。

「葬式の後、スヴェトラーナのお母さんは、ヴォズドヴィジェンカ村に行ってしまったんだ。親戚があちらにいるからね。それで、叔母さんとスヴェトラーナが家に残った。母親が出かけたら、叔母さんの天下だろう。どうして、二人で教室のドアを閉めたのか、なぜ、君が彼女に、他のものではなく、わざわざキューピッドの人形をあげたのかって、いろいろ叔母さんから問い詰められたんだ」。エディックは、黙ると、手拭いをたたんで、なぜか手のひらを拭き始めた。

「それから？　どうなったの？」　小枝は折れて、枝先が木の皮に申し訳なさそうにぶらさがっていた。

「だから……」、エディックは、手拭いを捨てると立ち上がった。

「毎日、そうだったのさ。でも、昨日はさすがにスヴェトラーナも堪忍袋の緒が切れたんだ。『勉強の邪魔をしているのは、叔母さんよ！』。そうしたら、叔母さんが、『なんですって！　そこまでいうのね！　明日、私があんたを連れて帰るわ！……アルザマスにね！』。そして、受話器をとって、市外電話の交換手を呼び出したんだ。スヴェトラーナは、『叔母さん、一言でも母さんにいったら、私……』といって、自分の部屋に閉じこもったのさ。そうしたら、叔母さんが、『隣近所にいいふらすわよ！　未婚の母になるつもりだってね！』。その後も、いろんなことをいって、外に出て洗濯物を取り込みながらも、また騒ぎたてたんだ。スヴェトラーナは窓から、叔母さんを隣近所の人たちが囲んでいるのを見て、台所に走った。近所の人たちと一緒に、叔母さんが部屋に入ってきて、『明日にでも、連れて帰るわ！　いずれ、私に感謝するわ！』ってどなり

散らしたんだ。その頃、すでにスヴェトラーナは、感謝するどころか酢を飲んで、床に倒れていた。叔母さんは、その様子を見て卒倒したらしい……。でも、今朝になって、容態が大したことがないとわかると、アルザマスに帰っちゃった。誰も彼女を見送らなかったそうだ。実の姉妹のスヴェトラーナのお母さんでさえもね。

エディックは、バイクのハンドルを握ると、サイドスタンドを外した。僕は、小枝を捨てると立ち上がって尋ねた。

「おじさんから借りたのかい？」

エディックはうなずくと、本物の鍵のかわりに、自作の合鍵を差し込んだ。ヘッドライトの上の赤いランプが点灯した。

「重いなぁ、くそ！」

エディックはペダルを踏み込んでアクセルを目一杯まわした。エンジンがブーンと鳴った。エディックは、回転を少し落とすと前に座り、僕は後ろに乗った。

「エディック、思いきり飛ばしてくれ！」

彼は、黙ってうなずくとギアをチェンジした。僕たちは、村をあとにしてアスファルトの道に出た。２ｋｍと書かれた標識を過ぎたあたりで、エンジンを全開にした。地区の中心街まで、二台か三台の車にしか出会わなかった。もしかして、もっと多かったかもしれないが、僕はずっと速度計を見ていた。交差点に近づくたび、速度計の針が六十キロまでおちる。スピードが遅く

感じて「エディック、もっととばしてくれ！」といった。

すると、エディックはうなずき、アクセルを限界まで回し、速度計の針はふたたび上がる。なぜだか、メーターから目をそらすと速度が落ちるような錯覚を覚えた。

「エディック、もっと！」

エディックは、肩をすくめてみせた。その時、メーターの針は限界を示していた。僕は、速度計に、きらきらと光るスヴェトラーナの瞳が映っているように思えた。

街に着く手前で、僕たちは、交通警察の前を通らないために田舎道へと迂回した。

中央通りに出るとエディックは、アクセルを吹かして、猛スピードで商店街を通り抜けた。曲がり角で突然、庭から少女が飛び出してきた。エディックは、とっさに急ブレーキをかけた。少女は僕たちを見ると、道端に立ち止まり、一瞬むっとした表情を浮かべたエディックは、ふたたびアクセルをふかした。その瞬間、少女が道路に飛びだしてきた。ハンドルを切り、バイクから飛び下りると、少女を道路脇に押しのけ、そのまま、アスファルトに転がった。でも、どうやってそれをやったかまったく憶えていない。倒れたバイクが転がって僕の肩に激しくぶつかった……。

僕たちが立ちあがると、女の子は怯え、緑色の家の木戸に入っていった。バイクは、側溝から後輪をのぞかせて唸り声を上げていた。タイヤはものすごい勢いで回転していた。エディックはバイクに駆け寄ると、エンジンを止めた。

僕たちはバイクを道路脇にとめて状態を確かめた。ヘッドライトは割れ、前輪の泥除けは大きく曲がり、右側のステップボードは折れていた。タンクを調べたが、それは大丈夫だった。

「なんとか無事だ」

そういいながら、エディックが身をかがめると、綿が目に入った。厚綿入りの黒い上着は肘のあたりが裂け、ズボンは膝のところまで破れていた。

野次馬が僕たちを取り囲んだ。緑色の家からバケツをもった女性が走ってきた。

「もしかして、エンジンかかるかな?」と僕は聞いた。

「いやぁ、無理だろう……」そういうと、試しにエディックが自作の合鍵を差し込み、ペダルを踏んだ。バイクは、ガタガタガタガタ……音を立て始めた。

「あなたたち、警察に叱られるわよ!　止まりなさい!」

バケツを持った女性が叫んだが、エディックはすでにギアを一速、さらに二速と切り替えながら、アスファルトの道を避け、住宅地の間を駆け抜けてなんとか病院にたどり着いた。門は開いていたので、そのまま中庭に入った。僕は、バイクを飛び下り、エディックは赤十字と書かれた救急車の傍にバイクを止めた。僕は彼を待たずに、中へ入った。

「どこに行かれるんですか?」、受付の年配の女性は、怪訝な目つきで僕を見てこういった。

「外傷外科は、……右にまがって三番目のドアですよ」

僕は追い返されるのを心配しながら、右に曲がると、もう少しでスヴェトラーナの母親にぶ

つかりそうになった。彼女は、白衣を着た男性と並んでいた。僕は立ちすくんだ。
「命に別状はありません。精神的ショックはありますが、二週間もしたら退院できるでしょう」
男性は、そういってカルテを閉じると、スヴェトラーナの母親が尋ねた。
「先生、引っ越しはどうでしょうか？」
「絶対に、やめてください！　少なくとも、今は安静が必要です」
医師が僕の方を見た。
「どちらへ？」
スヴェトラーナの母親は、驚きの声を上げ、僕に駆け寄った。
「ヴァレーラ！」彼女は、あわててバックからハンカチを取り出した。
「……あー、ヴァレーラ！　先生、まあ……彼、全身血だらけだわ」
彼女は、僕の頭を抱き寄せて、泣きだした。
「大げさなんだから！　大したことはありません。ちっとも痛くありませんから」
「なにあったの？」
「僕たち、バイクで少し……」
「あー、バイクに乗って……それで？」医者は診察しているような口調だった。
看護婦が来って、いった。
「一緒に行きましょう」

スヴェトラーナの母親は僕を離さなかった。
「スヴェトラーナに会いたいのです」
「それは、絶対にだめだ！」
医師はさらになにかいいかけたが、スヴェトラーナの母親が懇願するように見つめると、医師の態度は和らいだ。
「いいでしょう。ただし、私が一緒について行きます」
看護婦が僕の肩に白衣をかけ、それから、廊下を歩いて二階へと上がった。医師が、病室のドアを少し開けるとスヴェトラーナの姿が見えた。彼女は寝ていた。真っ白な彼女の顔は、厳しい表情をしていた。ベッドの隣には白いロッカーが置かれていた。僕はそこに目を向けた瞬間、狂おしいほどの懐かしさと幸福感に胸が締め付けられる思いにつつまれた。
なんと、そこには、あの人形が座っていた。キューピッドは、僕を見て笑っていた……。

戦勝記念日

《第二次世界大戦の戦勝記念日（1945年5月9日）の翌年について書かれた小説》

ヤーコフ・アントーノヴィチは、不自由な左足をひきずりながら、一・五トンのトラックのそばを行ったり来たりしていた。期待と不安の入り交じった気持ちで、列車が来るのを待っていた。しかし、その列車は来なかった。

列車は来るには来たが、子どもたちを乗せては来なかった。彼は、胸をなで下ろした。トラックに乗ると、搾乳婦たちのほっとした顔が見えたが、彼女たちのことをとやかくいっても仕方がない。彼は、トラック運転手のゲナージー・プシュカリョフに、コルホーズの集会所の前まで乗せていってくれるよう頼んだ。レンガで増築した駅舎の陰から車が見えなくなるまで、搾乳婦たちの押し黙った視線を感じた。

その日、彼は、看板屋の助けをかりて、映画ポスターの裏に電報の中身を書き写すと、幼稚園の向かいの板塀に貼り付けた。

近ク　特急ハバロフスクゴウニテ
ドミトリエフスキー孤児院ヨリ　子供タチ　出立ス
出迎エト見送リ　頼ミタシ
住民ニ　養子キボウシャ　アレバ　反対ナキヨウ　請ウ
上記内容ニ　相違ナシ　ポルコヴニコフ

電報は、戦勝記念日の直前にウラジオストクから打たれたものだった。だとすると、多少つじつまの合わない点があるのも仕方がない。いずれにせよ、コルホーズ（社会主義の道）の前の班長、現在は村長で、独身のヤーコフ・アントーノヴィチ・フヴォシには見当がついた。

「……反対なきよう、か――」

彼は、大きな駅の雑踏、列車の遅延、混乱、アルミニウムの味がするお湯、そして何が何でも戦後はじめての戦勝記念日を家で迎えようと意気込んで、列車の屋根や乗降口の踏み段にまで溢れかえった乗客たちを思い浮かべた。事前に電報が送られてきたのは、子どもたちに席を優先的に与えることへの理解を、関係各位から得るためであることを、承知していた。彼は深いため息をついた。もっとも、電報の送り主の名前は、ポルコブニコフではないのかもしれない。名前を入れ忘れた〝ナントカ？大佐[1]（ポルココーブニック）〟なのかも知れない。だが、もし、それが間違いではなく、送り主が実際に威厳のある軍人調の名字であったとすれば、むしろ、その方が都合が良かった。ヤーコフ村長は、この電報がコルホーズの議長になんらかの影響を及ぼすこと、そして車を出すことを、議長は拒まないだろうという自信があった。

《当然、断りはしないさ……。相手は、子どもだもの……。今のご時世、戦争にちなんだ名字も悪くはないもんだ》――ヤーコフ村長は、これからとりかかる仕事の手はずを考えながら、こう思った。

電報を受取った日の午後、彼らは駅に行った。

1　“ポルコーブニック”は“大佐”の意。電報の最後に記載されていた“ポルコブニコフ”は送り主名か、または大佐を意味する“ポルコーブニック”の書き間違えか。

スパスク市から、突然、ダイヤの乱れにより特急〝ナントカ？モスクワ号〟が到着すると伝えたのだ。ヤーコフ村長は、足を引きずり牧場に着くと、そこで運良く、運転手のゲナージー・プシュカレフと会った（昼の搾乳後、トラックで門に入ったところだった）。ヤーコフ村長は、牛乳の入ったドラム缶だけを下ろさせ、搾乳婦たちにはそのまま荷台に座っているよう命じた。

荷台に乗り込み、自由のきかぬ足で、荷台に設けたイス代わりの敷板をまたぐようにして運転台の後ろに座った、人民服の胸ポケットから電報を取り出して読み上げ、ゲナージーに早く車を出すようにいった。

「みんなさん、着いてから、いろいろと決めましょう。特急だとスパスク市から四十分くらいですから、遅れないようにしないと」

ちょっと前までは、前コルホーズ班長をニコニコしながら見ていた搾乳婦たちも、がっかりした様子を見せた。余計な食いぶちを家に増やさなくちゃならないのかしら、とでもいいたげに。

「ふうぅ……、やれやれ」と、まるでみんなの気持ちを代弁するかのように、ヤーコフ村長は大きなため息をついた。〝養子キボウシャ　アレバ　反対ナキヨウ〟

彼は、足を引き寄せた。《反対など？》

二日前、孤児院の院長がやって来て、いざという時のための小麦粉から油かすにいたるまで、かき集めていった。七月以降の半年間分は、穀物倉庫から援助の約束をもらっているが、それまでの自分たちの食料はすっかり足りなくなってしまっていた……。彼はふたたび深くため息をつ

いた。女たちは、前班長のえらく深刻そうな様子を察して、「タマネギも十分育っているし、ラディッシュもこんな陽気なら二十日までには収穫できるようになるわ、それにイラクサスープくらいなら作れるし、生活はなんとか大丈夫よ」などと話し始めるのだった。

駅に着くと、ヤーコフ村長は、駅前広場にある遮断機のような模様の、馬の手綱どめの傍にトラックを止め、駅の当直室に入っていった。その日の当直は、嫌味で、揉め事好きのイグナト・ヴォロンコだった。

イグナトはいつもと違い、まるで大切な客を迎えるかのように、慇懃な態度でヤーコフ村長に接し、自分の椅子を勧め、自らは長椅子に腰かけた。トラックをプラットホームに乗り着けることを許可し、もし必要なら、列車を遅らせてもいいとまでいった。

「あとで、チェルニゴフカ駅で遅れが出たと、苦情の電報を打つ人がでてもかまいませんよ。停車時間が、わずか三分間だなんて…。それに、乗客ときたら、ムチナヤ駅で乗り降りしてるのに、この駅が、ここら辺りの中央駅であるチェルニゴフカ駅と同じだとは認識しておらんでしょうからね。むしろ、遅れがでるぐらいのほうが……」

ヤーコフ村長は、これまで一度もイグナトの人格を垣間見たことがなかったので、ひどく驚いた。イグナトは、権力を与えてはならないタイプの人間だった。なぜなら彼が行う規制と緩和は、いつも法に違反しているからだ。そうはいっても、こちらだってイグナトが許可してくれたことを逆手に、車をプラットホームまで寄せることができる。それもこれも、子供たちに、列車

の中から出迎えの車を見せて、喜ばせてあげようという気持ちからだ。まあ、止めるんだったら……ここが便利だし。

ヤーコフ村長は、家に着くと、駅で思わず感じてしまった安堵感を恥じ、心の中で自分を責めた。まだなんともいえない。今日、子供たちが到着しなかったことは、良かったのか、それとも悪かったのか。それに、明日は、ヤーコフ・アントーノヴィチが搾乳婦を連れて来ることができない事態もありうるのだ。

実際、その通りになった。ヤーコフ村長と孤児院の院長ドミートリー・イヴァーノヴィチ・コロムビンは、板張りのプラットホームに立っていた。ちょっと下がったところには、ホームで商売をしている行商女たちがばらばらに立ち、列車を待っていた。さらに、その後ろには、荷台の脇に戦前の自転車をくくり付けた、空のトラックが止まっていた。昼の搾乳作業までには、まだ二時間ほどあり、ちょうど昼にさしかかり、活気づいてきた頃だった。みずみずしい若草から聞こえてくるコオロギや鈴虫など、羽をつけた音楽家たちのまったりとした鳴き声。まるで全身蜘蛛の巣に覆われたような、けだるい感覚。時折、小川の方からビュッと吹きこむ風が、蜘蛛の巣を吹き飛ばしてくれる。孤児院のコロムビン院長が歩き回るたびに、彼の大きめのジャケットがフワッとひろがり、丸眼鏡がきらりと光る。その姿はまるで、足長の賢い、丹頂鶴を連想させた。眼鏡と尖がった

長い鼻が、鳥に似た風貌を与えていたからだ。まさに、コロムビン院長は、鼻で何かを鋭く嗅ぎ分けているかのようだった。

にもかかわらず、今度も子どもたちは乗っていなかった。トラックに自転車を積み込むのを手伝いながら、ヤーコフ村長は、明日はわざわざ来なくてもいいと、孤児院の院長に伝えた。また、こんな悪路を自転車で来るのは、たいへんだろう？　それより、子供たちを施設に迎える準備でもしたほうがいい。明日は五月九日、戦勝記念日だし、お祝いの特別料理とかで歓迎会を用意するのもいいだろう。出迎えは、運転手のゲナージーと二人で大丈夫だ。

ヤーコフ村長が、孤児院の院長に来てほしくないもう一つの理由とは、明日は必ず、子どもたちが到着するからだった。子供は子供、みんな、同じ人間だ。でも大人は……体が丈夫そうで、綺麗な子供を選んで引取るだろう。選ばれなかった子供は……。そんな子たちを孤児院で歓迎してやらねばならない。それには、コロムビン院長の気持ちを尊重し、歓迎の気分を損なわないようにしなければ。

「まあ、とりあえず次は……十日にお越しください。その際も……事前にお電話いただければ」

ヤーコフ村長はそういった。

夜中、幾度か爆撃機の重苦しい不気味な音で目を覚ました。訓練飛行だ！　何度か外に出て、明るく照らし出された空港の滑走路や、漆黒の夜空に輝く星を眺めた。無数の星がうずまき状に円を描き、斜めに傾いている銀河は、まるで湖の中にもう一つの湖があるかのようだ。木の葉のざわ

めき、ほのかに甘く香る林檎の木、新木が香る冷たい井戸水――突然、これまでのツキに見放された辛い人生が思い浮かんだ。ヤーコフ村長は家に入って、広くて固い寝床で横になり、眠りについた。すると再び、飛行機の騒音が彼に迫るように響いた。――それは、夢の中でゆっくりと草刈り機の音へと変わっていった。しばらくの間、草刈り機の短い音を耳にしていたが、そのうち、彼自身が大鎌を手にどんどん遠くへ、川の方へと向かって歩き、妻のポーリナを捜していた。

「ああ、あれは、鍋を持って走るポーリナだ」

「ヤーコフ食べましょう！」

僕らは掘っ立て小屋のそばに座っている

自由、広々とした草原、刈り取った草の匂い、心地良い疲労感。

青空に浮かぶ二つの雲が、ポーリナと私の魂のように、繰り返し何度も、離れては一つになり、また離れては一つになっていった。

「コーリャ！　うちのコーリャはどこだ！」

ヤーコフ・アントーノヴィチが叫んだ途端、妻のポーリナは、一歩また一歩と、後ずさりしていく。そこにはすでに戦争中の世界が広がっていた。廃墟の山、焼け跡。あちらこちらで樹が折れ曲がり、木の皮がぼろ切れのように垂れ下がっていた。裸になった樹の白さが、人間の肌のようで、見るも恐ろしい光景だった。ヤーコフ・アントーノヴィチは、吹っ飛んだ柵の一つが、

電線に絡まっているのを目にし、鼓動の高まりと息苦しさを覚えた。まるで、誰かに鉛の軍靴で胸を踏みつけられたような気分だ。柵板の尖端にひっかかっているピンク色の小さな靴下が、風にひらひらと舞い、泣き叫んでいた。

「パパ！」

ヤーコフ・アントーノヴィチは、何度も飛び起きたり、目を覚ましたりする度に、外に出た……。日が昇り始める直前に、訓練飛行は終わった。

ヤーコフ・アントーノヴィチは、塀にもたれて、広々とした空を見上げた。昨夜は、すべてが憂鬱に支配された。でも、今、一日の始まりに、なにかはっきりとはわからないが、幸福の始まりを予感するのだった。

心に芽生えたこの想いは、彼をいささか驚かせた

この先、いったい彼になにが待っているというのか？

しかし、そこにやって来たのは、彼のささやかな暮らしを心配するクラーニャお婆さんだった。お婆さんは、朝食にと果実酒をテーブルの上に置いていった。彼は心底驚いた。どういう風のふきまわしなのだろう？　その瞬間、彼は思い出した。そうだ、今日は戦勝記念日だ。

今朝、ふと芽生えた想いは強まり、時間を追うごとに確信に変わった。

今日はきっと自分の人生を大きく変えるなにかが起きるに違いない。

そうした考えをつとめて頭から遠ざけてはいたが、駅に着き、昨日とは比較にならないほどの大勢の女たちの出迎え。そのほとんどが、孤児の引き取りを希望したことにも、彼はちっとも驚かなかった。サイロの形をした、駅の給水塔の近くの草むらに、物乞いたちがぼろ切れを広げ、パンやタマネギ、豚の脂身[2]を並べていた。《ベルモット酒瓶でも隠し持っているんじゃないか》――とヤーコフ村長が、何気なく思っていると、あやうく、レニカ・ヴォロンコの足につまずきそうになった。レニカ・ヴォロンコは駅長の兄弟で、両足がなく、黒い肌に、モサモサの髪の毛をした男で、スケートボードのような木の台車に乗っていた。彼はその台車を自分の体の一部のようにして、軽々と前へ進んでいくのであった。

「ヤーコフ、どうだい？　みんなよく集まったな」。　子供や犬が怖がるような太くしわがれた声で、レニカは嬉しそうに声をかけた。彼は、陽光に反射する赤ワインの瓶を不自由な身体に抱え、器用に台車を方向転換して、給水塔へと移動していった。

こんな日でもなければ、レニカの仲間たちと会うことを、ヤーコフ・アントーノヴィチが喜ぶことはなかっただろうが、今朝、心に芽生えたあの想いが、彼らとの出会いすら気持ちよく感じさせた。

《そうさ。みんな、同じ人間さ――》

脱穀場と穀物倉庫の方からも、どんどんと集まってくる人々を目にして、上着を直し、乗馬ズボンの埃をはらい、姿勢を正した。きちんとした服装で出かけるように勧めてくれたクラーニ

2　“豚の脂身”・・・ロシアや、特にウクライナでは豚の脂身を塩づけしたものを、黒パンにのせて好んで食す。

ャ婆さんに、礼をいわねばならない。素早い転調を繰り返しながら響くアコーディオンの音を聞きながら、微笑みを浮かべた……祭り気分が高まってきた、本格的なお祭りだ。彼は、威厳を保って、頭を上げ、不自由な左足が目立たないように、トラックへ近づいた。なんといっても、彼は責任者なのだ。

「スパスク市からの特急列車は出発しました。孤児院の子供たちは四号車に乗車しています。」駅構内に響く駅長の声を聞いた途端、自分が責任者であるという自信は揺らいでしまった。何度もノートを取り出し、里親希望者の名簿を確認する度に、真っ先に自分の名前が目に入り、威厳を保たねばならないことも、自分が誰なのかすらも、分からなくなってしまった。

そんな状態だから、列車が停り、出迎えの人たちが一斉に四号車を取り囲んでしまってから、初めて、人々は、責任者の存在を気にしはじめた。二人の車掌が信号旗を振りながら、出迎えの人たちを後ろに下がらせた。人ごみの後ろにいたヤーコフ村長が、車両近くまでくるのに時間がかかった。二人の車掌は、責任者を捜していた。

「責任者はどちらですか、どこですか」

車掌の一人がせわしげに声を張り上げると、群衆は無言であたりを見回し、ヤーコフ村長を前方に押し出した。彼は今、群衆の代表となった。同時に、彼は、やはり、チェルニゴフカの住人、ヤーコフ・アントーノヴィチ・フヴォシであり、戦争で妻と息子を亡くし、今日になって、孤児を引き取ることを決めた孤独な男なのである。

ヤーコフ村長は、茶色の上着に黒い帽子を被った若い女性が、列車の乗降口を下りるのを見た。星飾りのついたヴェールで顔を隠し、仮面舞踏会のような謎めいた印象のその女性は、その場の雰囲気にそぐわなかった。彼女は、プラットホームに降りると、軽く会釈をしてヴェールを持ち上げ、手で押えた。肩に分厚いパットを入れているためか、あたかも折りたたんだ羽根があるように、盛上った肩の部分が目に入った。

「どなたか、ここにドミトリエフスキー孤児院の方はいらっしゃいますか？」

ヤーコフ村長は、甲高い、興奮ぎみの声を聞いたが、すぐにはこの若い女性の声だとは気づかなかった。なぜなら、突然、人々がざわめき立ち、さっと列車から離れたからだった。そこには、台車から滑り落ちて、てんかんの発作で震えるレニカ・ヴォロンコがいた。

「まあ、なんてかわいそうに！」

芯が強くて、感じのいい、機転のきく、この〝町の女教師〟がいなければ、この先どうなっていたか。ヤーコフ村長は、心の中で、彼女のことを勝手に“町の女教師”と名付けた。

彼女は、頬を少し赤らめてはいたが、落ち着きを失うことなく、人々に向かって大声で叫んだ。とくに声の大きいことが良かった。誰もが聞き取れ、理解することができる。彼女はもちろん焦っており、あまり重要でないことから始めた。ハンドバックを胸に押しつけながら、書類を取り出し、どういうわけかドミトリエフスキー孤児院に渡す衣類や靴、おもちゃ箱三つ、毛布とシーツのセット四十点などの品名を読み上げ始めた。それはおそらく、てんかんの発作で丸太のよう

に横たわっているレニカを見るのが怖かったからだろう。

ヤーコフ村長が、コピー鉛筆[3]を何度も舐めては、受取りの書類にサインをしている間、運転手のゲナージー・プシュカレフは、周りの動揺も意に介することなく、車掌といっしょにいろいろな箱や衣装箱をプラットホームに下ろしていた。シーツセットが入っていた、最後の衣装箱（マホガニー製のずっしりと重く大きな衣装箱は、ブロンズの銘板にイニシャルが刻まれていた）は、休み休み引きずり出さねばならなかった。というのも、ゲナージーの隣で衣装箱の取手にしがみつくようにしていた、オーリャという名の十二歳くらいの少女が、邪魔になっていたからだった。

その風采は、やせっぽちで、洗いざらしの薄汚れたワンピースをまとい、丸刈りに裸足という姿だった。苛立ちと同時に、その少女の姿は憐憫の情を起こさせた。取っ手から手を離すように注意するたび、ふくれっ面になり、くりっとした明るい色の瞳は寂しげになって、石のよう固まっては、取っ手をさらに強く握りしめるのだった。でも、また衣装箱が動き始ると、彼女は目を覚ましたように、ありったけの力を振りしぼって手伝った。あまりに力をこめるので肩胛骨が突き出ているのが見えた。

「待って、待ちなさい、体をだめにするぞ」

ゲナージーは止めたが、少女は働き出すと、器用で、気が利いて、まるで別人のようだった。ただ、少々せっかちではあったが。女性がみんなそうであるように、体力のなさを熱心さで補おうとしていた。少女は、みんなより先に、あちらこちらへ機敏に動き回り、まるで女性の車掌長

3 「コピー鉛筆」・・・筆跡を消すことができない鉛筆で、重要な書類のサイン等に用いられた。時間が経つにつれ、文字がインキで書いたように消えなくなり、筆跡を永久保存できる。

のようだった。

衣装箱を列車の乗降口から下ろす段になって、みんなが、どうやったら一番降ろしやすいかと考えている。オーリャは、さっと乗降口の一番下の段に立って、待ち構えている、が、しばらくすると、衣装箱を下ろすのは自分の手には負えないことがわかったようだ。彼女の熱心さを、周りも気づかずにはいなかった。女たちは、優しく、思いやりの眼差しで見守った。いったい、こんな女の子がどうやって男たちを手伝えるというのだろう？　オーリャは、衣装箱には　手を伸ばさず、プラットホームに飛び降りて、今度は横から支えた。

「へえ、あんた、たいした助っ人じゃないか。」

女たちは、品定めでもするかのように驚き、男たちも、薄笑いを浮かべながら、オーリャのことを見直した。彼女は、自分に視線が向けられていることを感じると、さらに一生懸命に働いた。ヤーコフ村長も、女の子の軽々と動き回る姿には気づいていたが、その意識は駅の当直のイグナト・ヴォロンコによって遮られた。

イグナトは、男たちに、意識の戻ったレニカを駅に運ぶように命じると、ヤーコフ村長の方に飛んできて、列車を遅らせるつもりであると伝えた。〝町の女教師〟は、サイン済みの書類をハンドバックにしまいながらいった。

「どうして遅らせるんです？　書類にはサインをもらったし、荷物も届けたし」と、彼女はプラットホームに置かれている衣装箱を指さした。「子どもたちも……ああ、オーリャ！」と少女

を呼び寄せたが、返事はなかった。

女教師は意を決したように、衣装箱の方へと近づいていった。その横には、洗いざらしの薄汚れたワンピースに、痩せぎすな体、丸刈り頭に裸足の少女が石のように突っ立っていた。一分ほど前まで、気が効く機敏だった少女は、今はぼんやり衣装箱のブロンズ色の縁を見つめていた。若い女教師は、ヒールの靴をこつこつ鳴らしながら、少女の方に自信たっぷりに近づいていった。

「ねえ、石のように突っ立ってどうしたの？」

そういって、少々乱暴にオーリャの腕をつかんだ。すると少女は、突然びくっとして、その手を振り払うと、衣装箱にしがみついた。若い女教師は、ひどく動揺した。その顔は真っ赤になり、腕まで赤味をおびていった。しかし、突然、教師は、今にも、少女が泣き出すのではないかと思い、青ざめた。

「みんなさん」その声は震えていた。

「戦勝記念日おめでとうございます……」

女教師は、準備していたお祝いの言葉を、朗々と述べようとしたが、言葉は途切れ途切れだった。心臓を熱いもので突き刺されたような感覚と、周りの女たちが自分から遠ざかるような、無言で仲間はずれにされたような悔しさを覚えた。女教師は、その悔しさを抑えて、突然早口で、時々しどろもどろになりながら、愚痴をこぼしだした。

……いつも上手くやろうと思っているのよ……でも、結果は……もともと、私は孤児院の引

率者ではないの……ウラジオストックへ一人で向かう予定だったのに頼まれたのよ……今日は、どこの駅も人がいっぱいで……イマン駅やスパスク駅で子供たちが次々に引き取られて……で、彼女と荷物だけが列車に残ったの。だって、オーリャはずっと隠れていたのよ。

女教師は悔しさのあまり、愚痴をこぼしたのだが、別に同情を期待してのことではなかった。でも、不思議なことに、今度は、周りの女たちが彼女に近づいてくるような感覚を覚えた。

突然、耳をつんざくような汽笛の音で、女教師の声はかき消された。列車が動き出した。彼女は、列車に飛び乗りながら、オーリャを書類や荷物とともに孤児院に送り届けて欲しいとみんなに頼んだ。そして、最後にデッキから少女にむかって叫んだ。

「オーレンカ！[4]」

女教師は、咳を抑えるために口元を押さえていたジョーゼットのハンカチを振り、去っていった。彼女が去った後に残ったものはなにもなかった。ただひとつ、その叫び声が、息子を呼ぶ自分の声と重なって、ヤーコフ・アントーノヴィチの心を突き刺した。

「コーレンカ！[5]」

オーリャは、女教師に応えるように手を振り続け、体を前にのりだすようにして、ジョーゼットのハンカチをじっと見つめていた。そして、気が抜けたように、ふたたび衣装箱の取っ手に

4 “オーレンカ”・・・“オーリャ”の愛称系

5 “コーレンカ”・・・ヤーコフ・アントーノヴィチの息子のコーリャの愛称形。「オーレンカ」と「コーレンカ」の響きが似ていることから、主人公は、戦争で亡くなった息子のことを思い出している。

しがみついた。まるでその中に彼女の生きるすべがあるかのように。

「きっとそうだろう」

ヤーコフ村長は、思わず、オーリャの立場に自分の身を置いて思った。

《怖くないはずはなかろう、自分の友達が引き取られていくのを見て、この子はなぜかわかっていたのだろう、自分だけが誰からも選ばれず、引き取ってもらえないことを。悔しくて、唯一の拠り所の大きな衣装箱に隠れるしかなかったんだ》

「お姉さんたち、ちょっと、どいて、道を開けてくれないか」と、周りの女たちに頼むと、オーリャに近づき、彼女の肩に自分の大きな手をのせた。

「この子にうちの丘を見せてやりたいと思ってね」

女たちは身動きもせず、ずっと突っ立ったままだった。以前から養子の話を聞かされていたのに、突然、女の子、それも一人だけなんて、女たちには信じられないのだ。《そのうち、また、騒ぎ出すさ》――ヤーコフ村長は、そう思いながら、〝ツキ〟が自分の中に転がり込んできたことを喜び、決してそれを逃してはならないと誓うのだった。

「どうしたっていうんだい、ヤーコフ？」

女たちが両脇に寄ると、間にできた通路の先に、ボタン式の二列アコーディオンをひざにかかえた、白内障のサーシカ・ベズヴェロフの姿に気づいた。彼は、裸足で草の上にあぐらをかいていた。彼の前にいた女たちが退いたため、その顔には太陽が真っ直ぐ当たっていた。

「俺たちの音楽家、サーシカだよ」
オーリャの体に緊張が走るのを感じて、ヤーコフ村長は安心させるようにいった。
「怖がらなくていいんだよ。多少は目が見えてるんだ。頭をゆらして、みんなの同情をかっては、物乞いをしているのさ」
サーシカは、ゆがんだ薄笑いを浮かべ、つばを吐いた。
「ちゃんとしなよ、みなしごの娘に見られてるんだよ」と女たちはたしなめるのだった。
「なんだよ。別になにもしてないだろ」
サーシカは、びくっと体を動かし、日に焼けて牛の斑点のようになった、シミだらけの禿頭を太陽に向け、顔をみんなが見ている方へと向けた。

「屋根の向こうに青いのが見えるかい?」
オーリャは、おそるおそる頭を上げると叫んだ。
「わあ、近いのね!」
女たちは、そう!そう!とでもいうようにうなずいた。一方、ヤーコフ村長は、「いや、近そうに見えるけど、それほどでもないんだよ。私の家からなら話は別だけどね」といって、オーリャが瞬きする間もないほど素早く、彼女を抱き上げ、衣装箱の上にのせた。
「ちょっと横の方を見てごらん、木々が見えるだろう。あそこがコルホーズの果樹園だ。右に

見えるのが飛行場。果樹園のこちら側から、われわれの方に向かって立っている粘土壁の小屋、トタン屋根の白い家が私の家だよ」

村長の思惑を感じて、女たちの意見は二つに分かれた。一方はヤーコフ村長の肩を持ち、もう一方は、いったいこれで歓迎のつもりなのかしら？　とさわぎ始めた。「女の子には、ピロシキとかお菓をあげて優しくしてやるものなのに、衣装箱の上に乗せるなんて。あそこからこの子になにが見えるっていうのかしら？　男はどこまでいっても男、女の子には母親が必要なのよ」

ヤーコフ・アントーノヴィチ自身も分かっていた。もちろん、別のやり方があるのだろうが、自分にはこれしかできない。もしオーリャが私を里親に選んでくれるなら、なんとかクラーニャお婆さんも助けてくれるだろうし、自分は父親役と母親役の両方を引き受けるつもりだ。

「ゲナージー、トラックの座席にある包みを持ってきてくれ」

ヤーコフ村長は、そういうと袖で汗を拭いた。

「どうだい、オーリャ。見えたかい？」

「ヤーコフ、あんたは小さい子どもと同じだね」

と女たちは、たしなめるのだった。彼自身も家など見えないことは知っていた。しかし、オーリャとの話のきっかけをつかむため、そんな会話をつづけていたのだ。

少女は急につま先で立ち上がった。

「煙突は煉瓦作り？」

「うん、煉瓦だよ」と、ヤーコフ村長は答えた。
「とんがり屋根？」
「そうだよ」
「あら、見えるわ。果樹園の隣の家でしょ」
ヤーコフ村長が自慢げに、ひそひそ話をする女たちを見やると、彼女たちは静かになった。
「そうだ、そのそばのね――」
彼は、嬉しそうにそういうと、オーリャを衣装箱の上にのせた時と同じくらいすばやく、軽々と、地面に下ろした。
彼は知っていた、少女には家が見えなかったことを。
しかしそれでも、心の中で、少女には〝見えていた〟のだ。
「ねえ、オーリャ、僕も一人ぼっちなんだ。お前と同じようにね。まったくの一人ぼっちなんだよ」
緊張のあまり動揺し、言葉に詰まる。なかなか適当な言葉が見つからなかった。
運転手のゲナージー・プシュカレフは、クラーニャお婆さんから預かった風呂敷を持って戻ってきた。女たちは、その包みを見つめるオーリャのいぶかしげな視線に気づいて、自分たちが持ってきた食べ物のことを思い出し、さわがしくなった。ヤーコフ村長は、女たちよりも先に、ガーゼの包みを開けようと結び目を探したが、なかなか見当たらない。
「やれやれ、婆さん、やってくれたもんだ」

心のなかでつぶやきながら、ガーゼの風呂敷を衣装箱の上に置き、男なんて不器用なもんだと自分を慰め、落ちつこうと努めた。女たちは、自分たちが持ってきたピロシキや揚げ菓子、かりんとう、手作りクッキー、はちみつなどをオーリャに差し出し、「さあ、お取り、召し上がれ」と、あれこれ勧めるのだった。オーリャは、あまりのお菓子の多さにびっくりすると、すっかり諦めてしまったように、ぼーっとして顔の汗を拭いているヤーコフ村長にぴったりとしがみついた。そして、オーリャは、ガーゼの風呂敷の結び目を掴み、引っ張ってほどいた。オーリャの出してくれた助け舟に機嫌を良くしたヤーコフ村長は、女たちを制止した。

「みんなさん、ちょっと待ってください。うちもちゃんと用意してあるんですから……。」

彼が風呂敷をひろげると、中から全く同じ揚げ菓子や手作りクッキー、バター色のハチミツが出てきた。

「ハチミツだわ！」

オーリャは驚いたように叫び声を上げたが、すぐに真剣な顔になった。

「さあ、遠慮なくお食べ」

「お前が一生懸命働いてくれたご褒美だ。私は君にすぐ気付いたんだ。あのせっせと手伝ってくれている女の子は誰だろう？　ってね。私にもこんな……」

彼は、突然言葉につまり、黙り込んだ。そして、急に理由もなく怒りだした。

「あんたたちにいいたいんだが、そんな風に見ないでくれよ……もし、オーリャが私について

きてくれるのなら、私はオーリャの父親と母親がわりになるよ。これが素直な気持ちだ。信じるか信じないかは、どうぞご勝手に！」

彼は、馬鹿にしたわけではないが、どうでもいいよとでもいいたげに手を振り下ろした。ところが、そんな彼の仕草を見て心が和らいだのか、女たちの態度が変わった。

「ヤーコフ、私たちは別に……。ただの住民さ、女の子が決めることですよ」

オーリャは、ヤーコフ村長が自分の存在にすぐに気づいてくれたことが嬉しかった。あまりに嬉しくて、思わず声に出して笑いたくなるほどだった。正直なところ、オーリャ自身も誰かは自分を選んでくれるだろうと期待していた。だからこそ、ヤーコフ村長がハチミツを勧めたときも、ちゃんと役に立つ大人だと思われたくて、揚げ菓子を選んだのだった。それに、ヤーコフ村長が、急に、女たちにあれこれ当たりだしたのも、そう驚きはしなかった。彼女自身、なぜだかわからないけど、女たちに腹がたっていた。だから、女たちとヤーコフ村長がいろいろ話しているうちに、少女は長く考え込むこともなく、器用に手土産をガーゼの風呂敷に包むと、ヤーコフ村長の袖をつかんで〝行こうよ〟とせがんだのだ。

村長は、どうしていいか分からなくなった。あふれる感情のまま、少女の丸刈りの頭をなでようと、慌ててびっこを引いて彼女に一歩近き、手を伸ばした。でも、オーリャは、なにをしようとしているのかよく分からず、彼の腕の下からすり抜けた。そして、ヤーコフ村長を見てから、衣装箱の方に駆け寄ると、つい先ほどまでしがみついていた取っ手を静かに下ろして、戻ってきた。

「ゲナージー、後のことは任せるから、孤児院に届ける荷物も積んでいってくれ。でも、この衣装箱は、中身を空にしたら私の家まで持ってきてくれ。オーリャが使うから。これはこの子の物なんだ」

ヤーコフ村長は、強い調子でいうと、じっと衣装箱を見つめた。まるで、この衣装箱は、今の私の気持ちをなんとか受け止めてくれるだろう、そして、憶えていてくれるだろう、とでもいいたげだった。

「コロンビン院長に伝えてくれ。彼には別なものを作るから、とね。寸法だけ教えてくれと」思ってもいなかったことに、オーリャが突然、ヤーコフ村長に頭をもたせかけてきた。そのまま二人はいっしょに歩きだした。人垣はさっと彼らに道を開けた。音楽家のサーシカがいつものくせで、白内障の目を空に向けながら、アコーディオンで「りんご」[6]を弾き始めた。草の上には、サーシャの赤い縁のついた軍帽が、申し訳なさそうに裏返しに置かれていた。ヤーコフ村長は、立ち止まると、自分のポケットをさぐった。すると、サーシカは急に怒ったように頭を振った。

「なにもいらねえよ。行きな、行きなってば」

それでも、ヤーコフ村長が乗馬ズボンのポケットをひっかき回していると、サーシカは、アコーディオンを弾く手を止めて、こういった。

「なにもいらねえっていっているだろう。俺はただ弾いてるだけなんだよ。今日は祭りなんだ」

数歩進んでから、ヤーコフ村長が、いつものように不自由な体全部を曲げるようにして振り

6 “りんご”の歌・・・戦時中の流行歌

返ると、オーリャもいっしょに振り返った。どうして、サーシカは演奏を続けないのか？　不思議に思ったのだ。しかし、人々の押し黙った視線の壁にぶつかると、サーシカのことは忘れ、立ち止まって身なりを整えた。説明がつかないが、自分への強い自信を感じ、上からオーリャを見た。

「女たちめ、覚えてろよ……」

どうして、ヤーコフ村長が、そんな言葉をいったのかはわからない。それに対して、少女も眉をひそめて、つぶやいた。

「おぼえてろよ……」。少女はヤーコフ村長の腕の中に自分の頭を隠すと、ほとんど声もたてず笑い出した。村長は微笑み、二人はいっしょに歩き始めた。おかしなことに、そのほとんど聞こえないはずの少女の笑い声は、みんなにも聞こえていた。サーシカは、アコーディオンの蛇腹を左右に大きく広げた。女たちはざわめいて、ため息をつきながら、頭に被った色あせたスカーフの結び目の先で、涙を拭っていたのだった。一方、男たちにとっては、どうでもいいことのようで、罪のない陽気な罵言で、二人をからかっただけだった。そんな男たちの態度が、女たちを余計、傷つけるのだった。

結局、みんなは、ただ黙ったまま、サーシカの軽快な「りんご」の演奏に、夢中で踊りだした。

ヤーコフ・アントーノヴィチとオーリャは、駅前広場を横切って、通りへと入っていった。二人は、道沿いの家の前を通り過ぎるたび、藁の垣根から顔をだす人々に対して、こういうのだった。

「家に帰るんだ、頼もしい助っ人のオーリャとね」

甘いシャンパンの味

朝八時、南千島の近くを航海中の〝マーシャル〟型の大型貨物船の中で、三等航海士はブリッジに上がった。レーダーをつけ、明るく光る半径線がくるくると円を描いて回るのを見ていると、最近買ったばかりの車〝ザポロージェツ〟のワイパーを思い出した。

《便利なもんだ》と、三等航海士は思った。《どんな天気でも視界一〇〇パーセントだ》そういってレーダーのスイッチを切った。

「陸ともさよならだ！」と、ピュッと口笛を吹いた。

操舵手とは、あうんの呼吸で分かり合った。同じように学び、同じ道を歩んできた仲だ。

三等航海士は突然可笑しくなった。二等航海士との一件が頭から離れないのだ。

「あいつは検察官面してまだイライラしてるんだ」と、二等航海士のことをからかった。

操舵手はあくびをしていた。

三等航海士に向かって

「イヴァニッチ！　あれ、霧ですかね？」

「そうだな、霧みたいだな」

「白い大きな壁みたいで、なんでいきなり……」

「そんなの知るか！」

と三等航海士は答えた。

船の舳先は真っ白なミルクの中に入り込んでいく。船首のウインチのブームが霧にのみ込まれ、すっかり周りが見えなくなった。

「ひどいな！」操舵手は緊張した様子でいった。

三等航海士は平静を装っていたが、その実、彼もこの霧には驚いていた。ただ、かれは、何事にも動じない冷静沈着な態度を装い、規定よりもやや遅めに信号灯を点けた。そのまま揺れに身を任せていたが、ふたたびレーダーを覗き込んだ。

レーダーにはなにも映っていなかったので、彼は面倒くさそうに指示した。

「一八〇度に進路をとれ。」そういい残して、操舵室へ去った。

自分の勝手な判断で、三等航海士は警笛を鳴らさないことにしたのだ。《なに、問題ないさ》

彼は、貨物船が七人乗りのボートに接触した音を聞き逃した。

この接触で、ボートの外板はまるでくるみの殻のように真っ二つに裂けた。あまりの衝撃で男の子は身動きも取れず、「パパ！」という言葉さえ、叫ぶことも出来なかった。その時、力強い腕が男の子をつかんだ。彼は父親に抱かれて水面に浮かび上がると同時に、ほんの一瞬だが、砕けたボートが沈むその横を、巨大な船の黒い舷側が霧の中に消えてい

く姿を見た。

貨物船は、その後、五分ほど経ってようやく、霧の中から抜け出た。船はまるで、太陽の真正面に出たかのようだった。

《いうべきか、それともいわざるべきか？　イヴァノヴィッチとは気の置けない仲だ。やはりいうまい。》操舵手はそう決めて、なにもいわない決心をし、口をつぐんだ。

極東航海高等専門学校の卒業生として、彼には大きな未来が保証されていた。

《規則では、如何なることも、報告することが求められている……。でもそれが何だっていうんだ！》操舵手は自らの考えを打ち消そうとしたが、良心の呵責に耐え切れずにいた。《舷側から聞こえてきた、奇妙な、物が破損するような音の事実を報告しなかっただけでなく、一八〇度に進路をとれ！と指示した三等航海士の命令すらも、報告しなかったからだ……》

その日、太陽は燦然として赤く燃えているようだった。目の前にひろがる深紅の赤は、まるで何層にもかさなる雲の隙間から、真っ赤な血がにじみ出ているかのようだった。

「パパ、こんな太陽見たことある？」

「ないね」と父は答えた。

男の子は微笑んだ。

「パパ、今日、僕もパパも、生まれて初めてこんなすごい太陽を見たんだね。パパと僕が一緒にだよ！」。男の子は見る間に饒舌になった。父親は不安になった。

「パパ、僕、朝にはまだ、太陽ってまんまるだと思ってたけど、ぜんぜん違うんだね。まるで、誰かがかじったみたいだね？」

「そうだね」。父親は答えて、血まみれの太陽を見つめた。

実際、太陽は息子が見たとおりの様相をしていた。そんなことを考えながら、父親は頭をもち上げると同時に、自分がずいぶんと衰弱してきたことを実感していた。首も体も痛い、特に首スジがひどく痛んだ。《いやだめだ、がんばらなきゃ…。》父親は頭をもたげて、水面だけを見るようにした。暖かい海の、暗い水面だけを…。ゆっくりとたゆたうように向かってくる波は、彼には見えなかったが、全身でそれを感じていた。筋肉の一つ一つ、細胞の一つ一つで感じとっていた。父親は、疲れきった大魚も、同じように波を感じているだろうと思った。

「パパ、ほら、あそこの変な黒い雲が太陽を食べちゃっても、平気だよね？」

「ああ、どうってことないさ」と父親は答えた。《この子に覚悟をさせなくてはなるまい、いずれにしろこの子は感づいているだろう、頭のいい子だ。》

「なあ、パパ、仰向けになってもいいかい？」

「うん」

男の子は父親の首から手を放し、海面に横たわる父親の体の上に仰向けに重なった。男の子が少し体を下にずらし、その冷たくなった耳が父親の唇に触れた。《優しい子だ、もう他人を気遣うことができる》

父親は、小さな体をしっかり胸の上で抱きしめた。《この子に話をするのはもう少し後にしよう、太陽が再び顔を出すまで。》父親は、雨雲の隙間から覗く、柔らかく青いビロードの光に気付いた。《神よ！　あなたならなんでもできるだろう！　彼は意地悪く考えた―できるさ。この子だけでももてば……。おい、神よ、この子を助けてくれ、お願いだから、助けてくれ。もちろん俺にはからし種一粒の信仰心[1]だってありはしない、でも、この子だけは助けてやってくれよ、なあ、神様！》

「パパ、今『神様、神様』って聞こえたけど、神様なんているの？」、子供は尋ねた。

「だってパパ、神様なんていないっていったじゃない」

男の子は怒ったような声を出した。

「神様なんていないんだよ、坊や。お父さんはただね……」

「ただ、何か訳がわかんなくなっちゃったり、辛かったりした時に、みんなが神様！　神様！っていうみたいにパパもそうしたんだよね？」

「ああ、そうだよ」父親は喉になにかを詰まらせたように答えた。

「パパ、苦しい？」

1　「からし種一粒の信仰」　聖書に出てくるの言葉で、からし種一粒とは最も小さな物の代表を表す

父親は黙っていた。
「パパ、つらかったら返事しなくってもいいんだよ……。僕自分で答えるから、ね、パパ？」
男の子はやや黙って、それからおもむろに父親がいつもしゃべるようにいった。
「本物の男は、つらければつらいほど強くなるんもんね」
男の子はちらっと父親を見た。
「パパそんなこといったかな？」
「よくいってたじゃない、パパ！」
「そうかな。」と返事をしながら、息子に対してなにかきまり悪さを感じた。
「パパ、それって間違ってるの？」
「そんなことないよ、正しいとも、正しすぎるくらいだ」
「パパ、僕、とっても正しいことをいってるのって大好きだよ。僕、正しすぎるくらい正しいことって、すっごくすっごく好きなんだ。世の中で一番、そういうのが好きだな」
男の子は口を閉ざしたが、父親は、息子がまだなにかいいたげにしているのに気づいた。
「なにかいいたいのかい？」
「パパ、僕、本物の男かな？」
そういって、じっと黙り込んだ。父親は、息子の小さな心臓が高鳴るのを感じた。《確かに生きている、小さなエンジン》

君は本物の男だよ、誰よりも」。父親は真剣に答えた。生きたエンジンの鼓動は、いっそう強く高鳴り始めた。

「心配しなくてもいいんだよ。よけいなこと、考えなくても大丈夫だよ！」

「心配なんかしてないよ、パパ、ただちょっとだけ。僕がママにこのこと、なんて話すつもりか知らないでしょう、パパ。ねえ、ママにこの出来事、話していい？」

「もちろんだとも。なんなら、お父さんが話そうか？お前が本物の男だって」

「パパ！」男の子は大声を出して、身をすくめた。

父親は、縮まった体が身震いするのを感じた。《こんなことに体力をつかってはだめだ。だめだ、特に今は……。何とかしなくては！》けれど、どうしたらいいのだろう。

「パパ、ママにいわないでね」

子供は安心して、ゆっくりと足を動かした。

「ママはきっと、パパが無理に僕をほめているんだ、って思うよ。ママはいつだってそうなんだもん。僕知ってるんだ」

父親は手を換えて、右手で息子の体を支え始めた。

「どうだろう、ちょっと静かにしてなにか別のことを考えようか。おしゃべりはしないようにしようね？　いいね」

「ヨットに乗った時と同じように？」

「そうだよ」父親はほっとして答えた。ようやく子供の体力を温存する方法を見つけたと思ったからだ。
「パパ、でも神様のことだけは考えないでね？」
「わかった、考えないよ」
「それは正しいことなんだ」子供は褒めた
「いもしない人のことを考えてたって、しょうがないものね？　ママのことを考えようね？パパ、うちのママみたいな人は、どこにもいないものね？」
「そうだね、坊や、さあママのことを考えようか？」
「うん、考えよう」二人は黙った。

どんな時でも、妻のことを考えるのはたやすいことだった。近頃では、彼女のことを考えるのが、くせのようになっていた。
遠洋漁業の漁師たちにとって、じっとなにかを考えることは慣れていることだ。《楽しかったことを全部思い出していくぞ。もちろん、何度も思い出しているけど、でも、なあに、今日はもう一度、最初から全部思い出していくさ》
彼は水平線を眺めて、雲の隙間から青いビロードの光が明るく輝き、その周りが黄金に色づいき始めたことに気づいた。《太陽はきっと姿を見せるぞ》と喜んだ。《朝日はあんなに明るく、

美しかったんだ、日が沈むときもあんなふうになるかもしれない。この子は喜ぶだろうな……お日様こんにちわ！って……》

「パパ、寝てるの？」、彼は息子がささやくのを聞いた。とてもはっきり聞こえたので、少し目をひらいた。彼は息子の足を見た。青白くて、細くて、長い。ゆっくりと動かしているその足を見た時、息子の心の奥で、なにか穏やかで、楽しいことを考えている様子が手に取るように自分に伝わってくるのだった。

「……パパ、ママが今出かけるところだよ、ヘルメットを被ったよ」

……父親は少し毛布を引っ張り上げた。息子はベッドの中に素早くもぐりこむ。父親は海に浮かびながら、息子が毛布の中で居心地よく落ち着くのをまるで現実のように感じ、いっそう強く抱きしめた。二人は静かな足音とドアのきしむ音を聞いた。息子はじっと動かなくなり、枕に頭を埋めた。妻はテーブルに近づいた。妻が朝食について、なにかメモを置いていってくれるのだろう思った。彼らは3分ほど身動きをしなかった。それから静かな足音が、ほんのすぐそばまで近寄ってきて、息子は身を縮めた。足音は止まった。息子は息を潜めた。足音はしばらく止んで、やがて遠ざかった。ドアがばたん、と閉まった。スクーターのエンジンが怒鳴った。息子は、ばたばたしながら毛布の下から這い出てきた。

「パパ、そのうち絶対ママがエンジン壊しちゃうよ」
子供の瞳は、嬉しそうに輝いた。
「いや、大丈夫だよ」
「でも、もし壊しちゃったら？」、息子はいい張ったが、父親はその訳をちゃんと分かっていた。
「もし壊しちゃったら、二人で直してあげよう」
「それで、ママには何も文句いわないんだよね？」、興味津々で子供が尋ねた。
「そう、もちろん」
「ああ、ママは僕達が一緒で本当に幸せだね」
「じゃあ、僕らはママと一緒で幸せじゃないのかい？」
「僕らは、もっと、すごく幸せだよ！」と息子は大声で叫んだが、それは本気だった。
「起きようか？」父親が尋ねた。
「起きよう」と息子は答えて、それから二人は自分たちの森の小屋の周りを走って十周した。
湧き水で顔を洗い、それからようやく母親の残したメモを読み始めた。
「野蛮人のお二人さんへ、食べ物はすべて台所の床下収納においてあります。しっかり朝ごはんを食べてね、私は夕方まで出かけます。野蛮人のイゴリョク、またお父さんの布団に入り込んだのね？　二人にキスします。村に買い物で……」、そこで父親は息子を見て、笑い出した。
「パパ、なんて書いてあるの？　なにを買いに行ったの？」、子供は知りたくてうずうずしなが

ら聞いた。

「ママは『食べるものを買ってきます』って書く代わりに『しゃべるものを買ってきます』って書いてるんだ。ママったら、村まで『しゃべるもの』を買いにいったんだってさ」

二人は愉快な気分になった。あまりにもおかしくて、朝ごはんを食べている最中、ずっとママのことで笑った。

「ママって、本当に最高だよ」と男の子はいった。「ママはとっても頭の回転が速いんだから。本当に、一体どうしたらあんなにいろんな事、思いつくんだろう？　ママと一緒だと、絶対退屈しないよね？」

父親は笑いながら、息子も母親の気性を受け継いでいると感じた。とてもいい気分だった。ところがその後、男の子はランドセルから日本の海の風景写真がたくさん入ったカレンダーを引っ張り出して、静かになった。男の子は、いつも朝食の後にこれを始め、なぜかいつも父親はそれを見るといらいらし、みぞおちのあたりが痛み始めるのだ。

「あと何日？」と、彼は息子に尋ねた。

「あと十日だよ、パパ」とため息をつき、きれいな風景写真に目もくれずに、さっとカレンダーをしまい込んだ。

「パパ、十日って何時間になるの？」

「二四〇時間だよ」

「へぇー……」息子は驚いた。
「それから今日だってまだ二十時間もあるぞ、今日の二十時間分を忘れてるんだろう？」
「ううん、忘れてない、大事にとってあるんだよ」
「なるほど」と感心してこういった。
「お前、あの『ボート』で海に出ようと思っているのかい？」
「パパ、僕そのことばっかり考えてるんだ！」。我慢できないようにいった。
「僕、考えすぎて眠れないんだよ。僕たちがいなくて、船は、あの崖の下でさびしくないかな？でもパパが船の話をしないから、僕もなにもいわないことにしてたんだ。こんな日に悪い子になりたくないもん」
「よし、いい子だ」といって、水の入ったタンクを持って、二人は船に向かった。細い小道を通りながら、朝露が降りていないことや、ハシバミの林も乾いてしまっていることに気づいた。小道は丘の西斜面に沿いに、青みがかった玉石と白い滑らかな貝殻が敷き詰められた浜辺に向かってなだらかに下っていた。途中、二人は進む方向を東側の道に変え、丘へ上る道を歩き始めた。ハシバミの茂みが少し邪魔に感じたが、丘の頂上に出た途端、二人はハシバミのことなど頭から消えてしまった。太陽を見たからだ。朝日は、静かに水面から顔を出し、白鳥のように優雅にそのばら色の翼を広げた。海が真っ赤に染まった。海は、一瞬の無限の中で陶酔していた。
「お日様、おはよう！」

男の子は叫び、両手を揚げたまま、太陽との最高の出会いに、夢中で光り輝く海へ駆け下りていった。あの岩の向こう側の洞穴の中に、〝パールスニック（帆船）〟があった。〝パールスニック〟それがボートの名前だった。軽自動車〝モスクヴィッチ〟の立派なエンジンを搭載した、七人乗りのボートだった。

父親はエンジンのことをいつもこういっていた。

「モスクヴィッチのエンジンは素晴らしい。二〇馬力もあって、期待は裏切らないぞ」

……その通り、エンジンは裏切らなかったのだ。

《全てこの霧のせいだ》息子を支えている手を入れかえて、水平線を見た。雲の裂け目は広がって、金色がかった部分はいっそう鮮やかになっていた。

《どうしてこうなってしまったんだ！　このひどい霧も、あの貨物船だって警笛も鳴らさずに、まるで火事場に向かう消防車みたいな速さじゃないか！　いや、ダメだ、なにか良いことを考えないと、彼女のことを》。

息子にぴったりと身を寄せると、すすり泣くような声が聞こえた気がした。一瞬、身をこわばらせたが、息子がゆっくりと足を動かし続けているのを感じ、ほっと胸を撫で下ろした。

結婚式。昨日のことのように覚えている。同級生のトーリック・ラフスキーとパーシャ・バトゥフチン。パーシャは肌が浅黒く、長くて黒い滑らかな髪をしていた。いつも上着のボタンをはずしたまま、謎めいた微笑を浮かべ、少し足を引きずる歩き方はバイロンのようだった。トーリックは、ソクラテスのような額をした思想家で、その顔には人生を冷笑するような憂いが浮かんでいた。

結婚式で「酒が苦いぞ！新婚さん甘いキスを！」なんて絶対に叫ぶなよと、真剣に二人の友人に警告したもんだ。

「余計なことを心配するな」と、なぜかトーリックは嬉しそうに、甘いシャンパン二本をテーブルに置いた。

花嫁は婚礼衣装に身を包んでいて、新郎新婦は並んで、不自然に長いテーブルの上座に座っていた。招待客は盛り上がっていたが、新郎は友人のトーリックに向かってしゃべり続けていた。彼はまったく花嫁に注意をはらわず、傍から見ると、まるで祝い事の主人公は花嫁一人だけのようだった。彼は、この日にふさわしい黒いスーツは着ていたのだが、花婿らしく見えなかった。まるで、偶然行き合わせたお客がお祝いの席につき、ただ、なにか関係のないおしゃべりをしたがっているようにみえた。これには皆腹を立てたが、花婿自身どうすることもできなかった。彼はまだ二十歳だった。出来るだけ兄のほうを見ないようにしていた。兄はすでに二十三歳になっていて、ちょうど花嫁と同い年だった。兄が自分に先を譲ってきたあらゆることに、申し訳なさ

を感じていたが、結婚についてはとりわけそうだった。

そのうちに、突然扉がバタンと開いて、客間にジプシーの女性が駆け込んできた。赤い裾が広がったドレスを着た女は、金色がかったワインの入ったグラスを手にし、大声でいった。

「酒が苦い、苦いわ！！！　甘いキスを！」

女が耳をつんざくような大声でわめいたので、一瞬、その場のみんなはぽかんとしていた。それからにわかに我に返り、やおら活気づき、声をそろえて揺るがすような大合唱がその場を包んだ。花嫁は物問いたげに花婿を見て、返事も待たずにゆっくりと立ち上がった。彼も立ちあがり、素早く花嫁にキスして済まそうと思ったのだが、彼女が首に腕を回したため、恥をかかせないようにと、二人きりの時と同様に強く抱きしめた。キスは長々と続き、とても情熱的なものになった。それを見たジプシー女は叫んだ。

「お見事、お見事！」

この時は心底、兄に対してきまりの悪い気持ちがした。そんな苦境から救い出してくれたのは〝さすらいの音楽家〟ジプシー音楽団だった。彼らは盗賊ソロヴェイ[2]のようにどっと押し入ってきた。ジプシー女は、バヤン[3]弾きが投げたタンバリンを空中で捉えた。黄色い長靴を履いて、猫のようなピンと張った赤毛の口髭を生やし、細かな縫い取りがされたつば広の帽子をかぶったバヤン弾きは、まるで〝長靴を履いた猫〟を思い出させた。太鼓打ちは、ビール樽のようなそのお腹に青銅のシンバル付きの太鼓をのせ、叩いていた。雨に晒されて

2　ロシアの古い英雄叙事詩「イリヤー・ムーロメツと盗賊ソロヴェイ」キエフに続く道沿いの１２本の柏に木住み着く盗賊で、口笛で嵐を呼ぶことができる。

3　ロシアの民族楽器でボタン式アコーディオン

緑色に腐食したシンバルは、響くというよりひび割れ声を立てた。太鼓打ちは仕事に集中した。彼がこの音楽団のリーダーだったのだ。彼は、ほとんど右手を使っていたが、それは右手で音頭をとるバチを握っていたからで、バチの先端には厚いフェルトが巻いてあった。バチは絶え間なく動いていた。テーブルは壁のほうに押しやられ、グラスは飛び散り、椅子がひっくり返って大きな音を立てた。ジプシー女は、幸せを祈る恒例のワイングラス割りをし、タンバリンを叩いて円を描いて踊り始めた。あまりに早く動いたのでドレスが体に纏わりつき、ひざの所で絡まりあって、まるで焚き火の炎のようだった。バヤン弾きは窓台に飛び上がり、太鼓打ちは隅の方に身を寄せた。学生同志の結婚式は一気に盛り上がった。誰もが、あっという間に花嫁と花婿のことを忘れた。だから、二人は恥ずかしがることなく何回かキスをした。二人は満足だった。そんな二人をそっとしておいてくれることにも、みんなが陽気にやっていることにも、〝さすらいの音楽家〟たちが家族同然のように親しく感じられたことにも。素晴らしかった！

兵役から戻ってきた時だって、悪くなかったじゃないか？　扉を開けると、妻の姿が目に入った。彼女は床を拭いていて、そのそばのベッドカバーには、驚くほど見慣れた顔をした子供が座っていた。見慣れた顔をしたその子供は注意深く彼を見つめながら、おもちゃのゴム製のオンドリをかじっていた。妻は低い声で歌をくちずさんでいて、小さく後ろにまとめた髪の結び目が、彼女の拍子にあわせて揺れていた。彼は扉にもたれかかって、目を閉じた。それから目を開ける

と、ちょうどクレムリンの大時計が鐘を鳴らした。彼女はさっとエプロンで手を拭くと、子供を抱き上げた。

「新年おめでとう!」と彼がいうと、彼女は叫び声をあげた。軍服姿の夫を見たことがなかったのだ。それから抱き合って、甘いシャンパンを飲んで過ごし、彼は妻に何度もささやいた。

「一人で大変だったね、大変だったね……」

その度に、彼女はうなずき、彼の肩に顔を押し付けて泣いた。彼も大声で泣き出したかったが、あの、驚くほど見慣れた顔が、にこにこ微笑んでこちらを観察している前では、照れくさかった。

彼らはそのままベッドカバーの上に横になって、外套をかけて眠りこんだ。バケツと雑巾をそばに置いたままで……。その夜は、隣人たちが新年の祝いで何度ドアを叩いても、居留守を決めこんだ。

……太陽が顔を出した。彼には、もう、どうすることも出来なかった。《もちろん太陽が沈むまでは持ちこたえられるだろう。妻はきっと気づくだろうけど、夜にヘリを飛ばしたところでどうにもならない。あの時、霧さえなければ……いや、そんな悪いことを考えるのはよそう》

雨雲の大きな塊を溶かしてしまった太陽を見つめながら、今朝の太陽とまったく同じ形だが、じきに沈んでしまうだろうと思った。すでに、太陽の光は波にとけだし、体力も、やるべきこと

を行う分しか残ってはいないと感じた。
……時が来た。
「坊や」といって、ひどく苦い海水を飲んでむせた。
「パパ、体を起こしたいの？」
「ああ」とようやく父親は答えて、咳き込んだ。それから力を振り絞って、子供を肩に乗せた。
「何をずっと考えていたんだい？　坊や」
「ママのことだよ」男の子はあわてていった。ずっとしゃべりたくて、うずうずしていたのだ、男の子は手も、足も、おなかも、頭も痛くてもう我慢できないほどだった。
「僕たち、いっつもパパのことを待っててね、パパから電報が来ると嬉しかったんだよ。パパがいないお正月や誕生日には、ママは甘いシャンパンを買ってきて僕にも飲ませてくれたの。ママは『内緒にねっ！』ていってたけど、でもほんのちょっとだけだったよ。ほんのちょっぴりだったら、いいよね、パパ、ほんとにちょっぴりだったら、飲んだうちに入らないよね」
「ああ、そんなのかまわないさ」
もう時間だ、この子にいわなくては。
「ねえ、パパ、僕たちがどんな乾杯をしたか知ってる？」
「わからないなあ」
「僕たちにはね、いつも決まった乾杯の言葉があったの。それからパパがなんの仕事をしてい

るかによって、ちょっと言葉を変えてたんだ」
「へえ、一体どんな乾杯だったの？」。大きく息を吸い込んで、懸命に頭を後ろに向けて、父親は尋ねた。
「パパ、ママには黙っててね？」
「いわないよ」と父親は答えた。
「ママはいつでもこういったの。『パパが作家になれますように、本物の作家になれますように』」
それで乾杯して、ママが続けるんだ、『タイガに働く人たちのために』とか、『北極にいる人たちのために』とかね。それで今年はこういったんだ『海にいる人たちのために』って。パパ、これからは皆が僕のために『海にいる人たちのために』って乾杯してくれるのかな？」
「そうだね」
父親はうしろめたい気持ちになった。この子なりに感じているのだろう。
「以前、パパがお前をぶったことを覚えているかい？　まだ広場の近くの第三十六幼稚園に通っていた頃にね。ママの時計のことで、君が嘘をいった時さ？」
「覚えてるよ」男の子は顔を曇らせた。
「ごめんな、ホントに悪かったね」
「そんなこと別にいいんだ」。男の子はちょっとおどろきながらも、嬉しそうに微笑んだ。
「ほんとに、ぶたれて当然だったもの。もっと強くぶたれてもしかたなかったんだ、でも、ず

いぶん手加減したでしょう、パパ、どうして？」
「どうしてかなあ」
「僕、知ってる」と子供は答えた。
「でも、おしえないよ、いいでしょ？」
「ああ、わかったよ」
男の子は少し身をかがめて、水の中から手を出し、水面を手のひらでたたいて、いった。
「こういう風にさ、こんな風にぶつべきだったんだ」
けれども男の子の手は、一度水面を叩いただけで力を無くしてしまった。その手は重たく、いうことを聞いてくれなかった。息子の体が水面へ傾いてしまったので、父親は、もう一度自分の肩に乗せなおした。それは簡単にはいかなかった。
「嘘は絶対ついちゃいけないんだものね、パパ？」。やっと呼吸を整えて、男の子は尋ねた。
父親は、返事の代わりに「なあ」といいながら、不安で胸が張り裂けそうな気持ちを抑えつつ、息子に話しを始めた。
「僕と君はね、かもめになれるんだよ」。父親は、歯を痛いほど食いしばった。
「どういうこと？」子供は不思議そうな顔をした。
今度は父親があせったようにいった。
「それはね……」

父親は仰向けになり、子供を胸の上に乗せ、自分と向き合うように座らせた。
「僕と君は〝かもめ〟になって、高く高く飛ぶんだよ。ただね、〝かもめ〟になりたいって強く強く思わないとだめなんだ。ひょっとしたら、君が信じないだろって、〝かもめ〟になりたくないだろうと思って黙ってたけど……でも、君は、信じるよね？」
「うん、パパ」悲しげに答えた息子が、突然叫んだ。
「パパ、僕たちママの所へ飛んでいくの？」
「そうだよ、二人でママの所へ飛んでいこう、でも少し急がなきゃいけないんだ、お日様が出ているうちじゃないと、うまくいかないんだ」
「パパ、大切にとっておいたんだね？」
「そうだよ」と父親は答え、話を続けた。子供にどうしなければならないかを話し始めた。男の子は注意深く聞き、父の一言一言に瞳はますます輝きを増していった。最後には、父親の瞳と同様に、彼の瞳にも火が灯ったようになり、輝き出した。
「パパが『いち、に、さん』と合図するから、出来る限りたくさん空気を吸い込んで、深く深く潜るんだ」
「パパ、僕、パパにつかまってもいい？」
「もちろんだよ」父親は喜んだ。
「ただ、息が苦しくなったら、パパから手を放しなさい、パパは君より大きいだろう、だから

もっと深く潜らなくちゃいけないんだ」

「わかったよ、パパ」

父親は子供の向きを変えて、息子が最後に太陽を見られるように、その体をできるだけ高く持ち上げた。太陽はとても大きく輝き、まるで『これから一日が始まる、そう、始まるのだ』と感じさせた……

「いち、に、さん」いつもと違うような声で合図したが、子供がさえぎった。

「ちょっと待って、パパ！……お日様、さようなら！」、男の子は叫んで両手を挙げた。「お日様、さようなら！」、その言葉は父親の胸に痛みを伴って響いた。

《なぜ、あの時、嘘をついたくらいで、この子を……なんだってあんな事を……》

「パパ、準備できたよ」。男の子は振り返って、父親の目を覗き込んだ。大空を胸いっぱい吸い込んで、二人は太陽と一緒に波の中へ消えていった。

痺れた手で、男の子は、父親の縞の水兵シャツから手を離した、その時、一瞬、父親が羽ばたくような影を見た。

《ママ、僕たちママのところへ飛んでいくよ。飛んでいくからね！》……。